

〈研究ノート〉

戦後初期の学校図書館について聞く（下）

中 村 百合子

はしがき

このノートは、さきに『占領下日本の学校図書館改革：アメリカの学校図書館の受容』（慶應義塾大学出版会、2009）にまとめた研究の資料としたインタビュー記録を、インタビューを受けてくださった先生方ご本人のご了解を得て公開するもので、今回で2回目、完結編となる⁽¹⁾。

インタビューは、1999（平成11）年から2002（平成14）年に、当時の学校現場に教師として勤め、戦後をとおして日本の学校図書館に関わって活躍された先生方に行った。ご協力いただいたのは、インタビュー実施の順に、芦谷清氏、今村秀夫氏、笠原良郎氏、北嶋武彦氏、鈴木英二氏、室伏武氏、松本武氏である。前回、芦谷氏と鈴木氏の記録を公開したが、今回は今村氏、室伏氏、松本氏の記録を公開する。笠原氏と北嶋氏の記録については、戦後初期についての言及がとても少なかったため、この研究ノートでは公開しないことにした。

前回は書いたが、インタビューでは、先駆者の方々と筆者の対話をとおして、これまで記録されてこなかった占領期の学校図書館改革のいくつかの側面について明らかにしたいと考えた。うかがったのは、まず、学校現場にあって、戦後初期に学校図書館に関心をもつようになった経緯と、その仕事の担い手となった経緯である。当時の学校現場で先駆者の方々がどのようなことを考えていて、その考えや行動にはどのような個人的または社会的な背景があったのかということを知りたいと考えた。そしてもうひとつ、当時の学校現場にあって、占領軍と文部省による学校図書館改革の取り組みからどのような影響を受けたかを尋ねた。現場にあって先駆者の方々が占領軍や文部省

の周辺で起きていた動きをどのように受けとめていたか、アメリカの影響を受けたか、また現場で独自に考え進めていたことがあったか。そうしたことを中心にお話をうかがい、インタビューはそれぞれ約2時間にわたった。時間が許すのであれば、戦後の学校図書館史についての総括的なご意見も、各先生が過去に書かれた雑誌記事などをてがかりにして、聞いた。今回の記録の公開にあたり、背景の説明を加える意図から、記録に脚注をつけたが、これはすべて筆者が記したものであり、その部分の責任は筆者が負う。また、亡き松本先生は、私の求めに応じて、時には大胆にいわゆる裏情報のようなものをお話くださり、ご存命中にはその全面公開をお許しくださっていた。しかし今回改めて見直し、特に個人情報に関わる複数箇所を、関係者の気もちに配慮し、話の流れが見えなくなる範囲で、私の判断で削除した。これについての責任もすべてひとり筆者が負う。

今回も、ここに公開するに至るまでには、インタビューにご協力くださった先生方に、テープ起しをした記録を何度も確認していただくなど、大変なご面倒をおかけした。今村先生、室伏先生、記録公開までのご協力、本当にありがとうございました。もともとは全面的な公開を考えてはインタビューをお願いしていなかったため、今回の公開をはじめためらっておられた今村先生には、無理を申し上げ、最終的には私の希望を全面的に聞いていただいて、恐縮している。ここで心からの感謝をお伝えしたい。また、松本先生の記録については、校正を芦谷先生にお願いして、快くお引き受けいただいた。2010年6月のある日、全国学校図書館協議会にお部屋を借りてお目にかかり、最終的な作業を一緒にしていただいた。インタビュー記録の公開では、何年にもわたって、芦谷先生にたびたび助けていただいたり、励ましたりしていただいたりしたことを思い出す。その、芦谷先生らしい教育者のまなざしと態度に、私は学んだことがあるように思う。心から、ありがとうございました。

最後になってしまったが、本研究は、1999年度日本図書館情報学会研究助成金により実現した。ここに記して感謝いたします。

今村秀夫氏へのインタビュー記録

インタビュー実施日：1999（平成11）年12月10日（金曜日）

今村氏略歴：1926（大正15）年生れ。1947（昭和22）年、東京都で新制中学校の教諭となる⁽²⁾；1953（昭和28）年、慶應義塾大学文学部図書館学科を卒業、同年、東京都目黒区立目黒第十中学校の教諭となる⁽³⁾。1963（昭和38）年から新宿区立落合第二中学校、1974（昭和49）年から新宿区立四谷第一中学校の教諭⁽⁴⁾。その後、実践女子大学教授となった⁽⁵⁾。

中村 先生の書かれたものを読んだ範囲内でしか、私、ご経歴を存じ上げないのですが、先生は戦中から、または戦後すぐの頃から農村の読書運動にかかわっておられたというのを読んだのですけれども⁽⁶⁾。その事について詳しくおうかがいしたいのですが、そういった読書運動というのはよくあったのですか？

今村氏 戦後なんだけれどねえ。一時期、戦後昭和の21年から数年間かな、全国的にねえ、日本でもあちこちに、いろんな形の文化運動が起きてくるんですよ。そういう時期があったの。いろんな人がいろんなところで、いろんな形の文化運動を、展開しているんですよ。かなり著名な方々が、その中で活動しているのを見るんだけど。これ、関西関東を問わず、全国的ですよ。で、ちょうどその時期と重なって、別に相談したわけじゃないけれどね。私が関係していたのは、今のあの横田米軍基地の北側っていうのかな。今、瑞穂町って言っているところです。

中村 みずほ？

今村氏 瑞穂の国の瑞穂ね。そこにずっといたんですけれどね。小学生の頃からそこでずっと生活していたのだけれども。斎藤尚吾っていう、これはあの、なんていうんですしたっけ、親子読書運動ね、親子読書運動の方面で有名でしょう。で、この人と、瑞穂っていう町の小学校の教員をやっていた、今は瑞穂町の町長をやっている、関谷久という人。この人はね、僕と一緒に、一番最初に書いたあれに出てくると思うんだけど⁽⁷⁾、瑞穂中学校の教員だったのね、僕と一緒に。その関谷氏の方が1年先輩なものだ

から。で、親しくしていたわけね。その3人と、もう1人。あの当時はね、青年学校っていうものがある、農村には。その専門学校の教師をしていた、赤岡〔春海〕という人と、その4人かなあ、が中心になって、あと、村の青年団の男女の人たちに働きかけて、一緒にね、みずほ文庫というものを、つくったの⁽⁸⁾。そのみずほというのは、ひらがなで、「みずほ」と書くの。

で、結局、農村地帯の人たちは、あの当時、ほとんど文化的なものに接触していないし、もう旧態依然たる農業でね、その農村青年自体が、いろいろ悩みや問題を抱えていたのね。そういう問題を勉強していく為には、やはりどうしても、書物から得るところが多いだろうと。で、書物と同時に、その道の人々を招致して、話を聞くという、そういう文化的な活動を、どうにかしていかなければならないだろうということ。だから、みずほ文庫というのは、ただ文庫をつくるということではなくてね、そういう活動をねらいにして、本当に、村の農村の青年たちがね、一緒に僕らを含めてそうだけれども、学んでいくという、そういう基盤をそこへつくるみたいに。で、農村の読書運動をはじめたわけね。

教育学専攻ですか？じゃあ留岡清男なんていう人は知ってる？ご存知ないかな？まあ、立派な教育学者だけれども。それから、城戸幡太郎さんね。中村 ああ、はい。

今村氏 その人たちが一緒になって。留岡さんというのは、そもそもお父さん（留岡幸助）時代から、北海道で農村での教育を戦時中からやっていた人で。この人たちがね、なんて言うんだろう？図書の普及運動をやっていたんですね。今の東京駅の近くに事務所を設けて⁽⁹⁾。

中村 はい。

今村氏 農村地帯にいい本が全然流れないというね、流通機構等の問題があったね。だから、すぐれた本を、特に農村地帯あたりにね、当時どこへでもそうだけれどもね、農村地帯は特にひどいから、農村地帯に流してくれということ。今で言えば、ブッククラブみたいな形のものをつくっていたんですね。これは大人、青年層、それから子ども層もね、に対する優れた本を、ということ。で、ここに東〔京〕大〔学〕の経済学者たちに、

わざわざあの片田舎までね、座談会みたいな形で話をしに来てもらったりね、随分助けてもらったんですね。そういういわゆる農村の読書運動をはじめていたんだけど、僕はまだその頃、学生だったの。師範学校の学生だったときですよ。

中村 終戦時はまだ学生でいらして？

今村氏 そうそう。僕は昭和22年に師範学校を卒業してるの。で、みずほ文庫がはじまったのが、もう終戦直後でしたから。昭和21年でしたね。で、まあ村の生活には娯楽が全然無い。本屋も無きゃ、何も無い状態でしたから。だから映画会なんかを催したりね。で、優れた映画を、フィルムを借りて来て上映して観てもらおうというようなことをやっていたんですね。ただねえ、その中に子どもたちもずいぶん入っていた。そのみずほ文庫っていうのは、本はどうしたかっていうと、本は持ち寄り文庫なんだよね。皆が本を持ち寄って、それからもうひとつはそれを貸す時に、微々たるものだったと思うけれど、費用を取ってね。それで我々は、会員みたいな会費を払って、それを元にして、その留岡さんのあたりから、優れた本をどんどん買ったり、それから映画会を催して入場料を取って、その入場料で、というようなことでやってたりしていたんですね。で、子どもたちとも随分やってきたりしたんだけど、特に中心だったのは、農村の青年よね。青年層との催しを随分よくやっていたんだけど。僕なんかは学生で、うちが農家じゃないからね、日本の農業の事情をよくわからなかったんだけど、大変教えられて大きかったことを覚えています。

ただ、やっているうちにねえ、読書の普及など、もう大人に働きかけるのはね、非常に無理だっていうことがわかったのね。せいぜい20歳前後の人まではそれなりの動きはあるんだけど、それ以上の人たちに働きかけても、ほとんどもう、早く言えば手遅れっていうのかな。読書運動を盛り上げていくことは不可能だ。それから、読書の普及ということねえ、大きなねらいにしていたんだけど、それ以上の普及っていうのは、上の層の人たちにはほとんど広がっていかない。それで、これは小さい子どもうちからね、子どもたちに働きかけていかないと駄目だっていうことを、痛切に感じて。それで、学校図書館をつくる仕事に入っていたわけね。

直接入っていったのは、そういうことなんですよ。

中村 じゃあ、そういった思いをもちつつ、学校を出られて、で、新制中学の教員になられたんですよ。

今村氏 そうそう。で、その新制中学の教員で、早く言えば何にも無いんだから。校舎も無いし。あのおそこ〔筆者注：『学校図書館』誌上の連載⁽¹⁰⁾〕に前に書いたような様相で、何も無いんですからね。で、そこでなんとか子どもたちに本を読ませたいと。とにかく図書館というよりも、もう本をたくさん集めてね。そして子どもたちに、ということではじめていったわけね。で、そこに当時参加していた人たちは、後年、いろんな形で、いろんな方面へ発展していくわけですよ。で、僕はまあずっと学校図書館の道を歩いてきたけれども、斎藤尚吾さんなんかは親子読書の方面へ働きかけていった⁽¹¹⁾。ああいう全国的な組織もつくり上げて。これもねえ、大変だったわけね。まだまだ非常に保守性の強いところですからね。時代もそうだし、戦後間もなくだし。で、その特定政党のね、活動だというような誤解を招いて。

中村 学校図書館運動がですか？

今村氏 まあ、僕らのやっていることがね。

中村 ああ、読書運動？

今村氏 みずは文庫自体がね。だからそこへ集まってくるのはみんなそういう連中だろうという。それから僕が教員になって行った時も、絶えずチェックされたんです、そのことをね。で、まあどうやら4年間、途中で『学校図書館』誌への連載はやめちゃったんだけれども、あの田舎の学校に、あの当時としては大変珍しい、学校図書館ができたんですよ。いわゆる図書館の机だの椅子だの図書館用品をね扱うね、伊藤伊だとかキハラだとかあってありますよね？

中村 はい。

今村氏 ああいう店の用品が入った本格的なものだったんですよ。で、できあがる、というところまでいっているわけね。その直前に、もう後継者もいたし、もっと本格的にねえ、やらなきゃいけないし。ちょうどその時、学校図書館協議会が発足して、そしてスタートしていく時期なんですよ。

その辺のところ、松尾〔弥太郎〕さんあたりが詳しく書いていますからね。それご覧になるといいと思うんですけども。で、僕は、じゃあ少し専門的にね、慶應〔義塾大学〕で勉強してくる、ということですね、教員をやめて、そして、そこへ入ったんですよ。まあアメリカの図書館学を勉強するため。その時に、学校図書館協議会を設立した、松尾弥太郎という、この人あたりが、是非あなた行って勉強してきて、学校図書館運動の方を手助けしてくれ、と言うんで、やりましょうという約束で、慶應へ行った。で、あそこで2年間勉強をして、それで再び教員へ戻ったんですね、都内の。そういう経過をたどって、学校図書館協議会あたりとは、つながっていった。

中村 話は戻ってしまうんですけども、『手引』を読んで、分類目録法についてなどよく勉強したっていう風に、何かに書いてらしたんですけども⁽¹²⁾、その『学校図書館の手引』で、特に読んだところは・・・。

今村氏 それは昭和23年の？うーん、ただねえ。

中村 はい。それはどこから入手されたんですか、当時、学校に回ってきたんですか？

今村氏 いやいやそうじゃなくて、それはねえ、昭和23年でしょ？僕なんかやっていた頃は、ちょうどその瑞穂中学校で、22年から4年間ですからね、26年の3月までいたわけだから。その間やっぱりあの松尾さんとかね、学校図書館協議会がこれからスタートするところで、あちこち働きかけをやっていたわけよね。で、松尾さんたちと、あるいは滑川〔道夫〕さんたちと知り合ったのも、その頃ですからね。そういうところから恐らく僕は聞いたんだと思う。だけど、あんまりあれを使わなかったと思う。というのはね、どうしてかっていうと、要らなかった。というのはねえ、あの時にねえ、青梅市にね・・・。

中村 ああ、公共図書館。

今村氏 近いんですよ。あそこに都立の図書館（東京都立青梅図書館）があって、久保〔七郎〕さんという・・・当時の図書館長。

中村 ああはい、どこかに書いてありましたよね⁽¹³⁾。

今村氏 あの久保さんという館長がね、大変熱心に援助してくれてね。その

へんから大分聞いたりして。で、この人も、穏やかな人で、よく考えている人でね。公共図書館の形態をそのまま学校図書館にもち込むようなことはね、しなかったんだよね。『手引』を読んでいて、たとえば分類とかだとね、2桁あれば十分だとかね、というようなことで。だから2桁くらいの分類法。今から考えるといろいろ問題があるんでしょうが、そんなようなところで適宜本を整理してね。といっても、本自体がね、やっぱり読み物が多くて、読み物っていうか、文学のね。で、今のように非文学の分野で優れたものが、非常に少なかったの。雑誌なんかでも、『子供の広場』とか、それから『銀河』だとかね、『赤とんぼ』だとか。こういう雑誌が出て間もなく2、3年で消えていっちゃうの。本はもうもっぱら読み物ですよ。あの、男は探偵物、女は少女小説ですよ。でない、子どももね、ついてこれないっていうのが実態。とにかく、おもしろい本じゃないと手にしてくれない。

僕が、今の新制中学校が発足したの昭和22年ですよ、その22年に教員になったわけだから。そこで、その瑞穂中学校も小学校の校舎を借りてね、スタートするんだけど、その時の子どもたちは戦争中のあのごたごたを通過しているでしょ。だから、学校なんていうのは、まったく関心が無かったわけよね。しかも、共学じゃなかったでしょ、それまでは。にわかには、昨日まであの小学校で男女別々にクラス組んでいたのを、今度は共学でしょ？教室へ入らないわけよ。だからもう、それをねえ、だましまし、2日も3日もかけて教室へまず子どもたちを入れるということが……。で、教室へ入った後、今度は教科書が無いでしょ。あってもタブロイド新聞みたいなやつをねえ、4つくらいにこう折ったような教科書だったのね。これもかなり高等的な内容があって、ほとんどついていけない。そういうのもあったから、結局授業にはならないので、少しでも役に立つようにね、本を見つけては読んでやったり、それから実際に実験をしたり、自然の中で遊ばせたり。まあいろんなことをやってきたんです。まあそういう状況でスタートしている。

とにかく、一番のスタートは、ひとつには、とにかく子どもに優れた文化財を与えたいと。何にも無い時代ですからね、勿論、紙芝居も今のよう

に手に入らないし。教科書すら満足にないんですからね。ところが、慶應へ2年行って、終ってから、また今度は目黒区の方の中学校（目黒第十中学校）に赴任したんです。そこでも、まず学校図書館をつくるということから、教員生活がはじまった。その時はねえ、あんな瑞穂時代のような金集めからはじまる苦労はいらなかった。というのは、この中学校の創立5周年でね、学校図書館をつくりたいというPTAの要望が。それで専門家を呼べていうことで、僕はそこの教員に呼ばれていったわけね。これも、違った意味でのトラブルが随分あったんだけど。大変大きい100坪くらい、あの当時ではちょっとめずらしい、独立建物の学校図書館をつくって、ここでいろいろ活動を開始したんですよ。その時の実践の様子が、『子どもをみつめる読書指導』⁽¹⁴⁾という国土社の、あれに書かれているような内容がほとんどあそこで・・・。

中村 じゃあ、『手引』を読まれた段階では、まだいわゆるアメリカ式の図書館学の中の学校図書館っていう概念に影響を受けたとかっていうのは、あまり無かった？

今村氏 うーん、もうほとんど。後でね、『手引』を見て、なるほどなるほどって、色んな考えをもつけれども、僕が農村の中学校で図書館運動と取り組んでいた時は、影響は受けていない・・・。読まなかったに等しいでしょうね。手元にはあるけれどね。ま、あんな段階じゃなかったもの。ただ、だんだんわかっていったのは、僕みたいに、子どもたちになんとかして優れた文化財をね、何にもない農村地帯の子どもたちに与えようと思ってもね、出てくる子どもの出版物がね、でも全部、都会の子ども向けなの。で、農村の子どもには、農村の子ども向けに意識したのをもっと欲しいということをつくづく考えて、絶えずそういうことを言ったり、探したりなんかもしましたけれどもね。だから、結局あの当時はもう読んで、おもしろく楽しむという。まあそれでもいいだろうとね、納得せざるを得なかった。ただねえ、その当時一緒にいろいろ、社会科の教師で、学校図書館の運動やなんか、一所懸命、同じ地域でね、やっていた人たちと、やはり一緒になっているわけですよ。

中村 お名前なんかは・・・

今村氏 うーん。たとえば、沢辺寿一。それから後に、日本作文の会の委員長になった、今井誉次郎。もう亡くなっちゃってとっくにいませんけれどね。この人は隣り村の小学校の先生をやっていたんだけど。その当時、彼は『農村社会科カリキュラムの実践』⁽¹⁵⁾ っていう本を書いて、毎日出版文化賞をもらっていたのね。大変優れた社会科の教師だったわけよね。沢辺さんも社会科。で、そのへんの実践を見たり聞いたりしているうちにねえ、気がついていたのは、当時あの経験主義の学習ということが、非常に強調されていたわけでしょう？で、直接経験ということで。で、これ、生活綴方の、いわゆるあの根源となっている、北方教育の方のね、流れの中でもね、やっぱり自然から直接学ばせる、それから社会へ直接触れさせて学ばせるということがあったんだけど、ちょっとそれとはまた違うんだねえ。当時のいわゆるあの、なんていうの？コアカリキュラムね。

中村 あ、はい。

今村氏 あれで、あの、ただねえ、経験主義だけのねえ学習だけでいいのかっていうこと。作文の会の、生活綴方の運動の中では、それだけじゃ駄目だっていうことを、早くから、戦前から、認識しているのよね。で、なんとか、本からも学んでね、いかないと、ひとつの教科としてね、指導していくことは非常に困難だっていうことを、生活綴方の人たちが意識して、間接的な経験ですよ。非常に間接経験をも重視して、まあ学校図書館のはしりって言えばはしりって言うような学級文庫みたいなものをつくって、そしてそこへいろんな資料を集めて、学習させるっていうようなことを、非常に悪条件の中でね、今のように優れた本なんかありませんからね。でもそういう間接経験を重視する、っていうことを、前から言っていたわけです。だからやはり私は当時はね、とにかく子どもに、できるだけ、この貧弱な児童文化の中から、文化財をせめて何か与えたいということで進めてきているけれども、当然やがてその問題にぶつかっていく。だからそういう意味では、あの当時、アメリカあたりでも盛んに主張していた、「資料センター」とかね、「教材センター」とか呼ばれている、としての学校図書館の役割、機能っていうんですかね、それも必要だっていうことはね、その当時感じていたわけです。その人たちのおかげでね。ただ、当初出発したのは・・・

中村 子どもの読書。

今村氏 うん、子どもの読書を第一にね。僕なんかでもね、このへんでもね、滑川さんあたりも、座談会なんかで言ってないかな？国分〔一太郎〕さんあたりもね、学校図書館の運動っていうのはこれでいいんだろうかって聞いているんですよ。滑川さんはこれに答えて、今はねえ、とにかく子どもたちが自由に本を読めるっていう環境をつくってね、本を読ませていくっていうことをね、それを土台に、大事にしなきゃならない、という風に言っているのよね。これはいつだったかな？これ何年だろうねえ。あ、これはもう昭和40・・・。これかあ、昭和34年ね。昭和34年の段階でそういうことを言っているのね。⁽¹⁶⁾

中村 はい。

今村氏 僕もそうだし、いまだにそう思っていますけれどもね。結局、僕は、さっきから言っているような立場で学校図書館を。それに対してねえ、社会科の教師なんかを中心にしてね、あるいは社会科の教師じゃなくても、直接経験の学習だけでいいのかっていう疑問からね、やっぱりあの子どもに、学校図書館を通じて、教材のようなものをね、そして間接的な教育もやっぱり必要だっていうことを考えて、学校図書館の運動に入っていった人たちもいると思う。そこの辺のところのね、僕はだまかに分けて二つの流れがあったと思うんですよ。

中村 先生は、だんだん若手教師が増えて、社会科がはじまって、学校図書館は一般的に注目されるようになったっていう風には書いておられるんですけども・・・⁽¹⁷⁾

今村氏 うん？一般的・・・

中村 その一般的に注目されるようになったっていう、広がっていくようになったきっかけっていうのは、その児童文化運動よりも、社会科がはじまったっていうことが大きかったっていうことですか？教育界っていうことで考えてみて。

今村氏 いや、必ずしもそうじゃなくって。社会科を中心にして、いわゆるコアカリキュラムみたいなものが、展開されていくでしょ？社会科学習の中から、やっぱり学校図書館のね、子どもたちに読書を、いわゆる読書指

導センターとしての機能だけじゃなくてね、学習センターあるいは教材センターとしての機能をね、もたせていくということの必要性はね、当時の社会科の教師が悪戦苦闘している姿を見て、刺激を受けたことは事実。でも、社会科がはじまったからとは、必ずしも・・・

中村 言えない。

今村氏 うん。で、その一、当時の社会科で満足してやっていた教員もたくさんいるわけだから。だから、今、名前あげた人たちは、社会科に真剣に取り組んでいて、そこに、どうもこれじゃあっていうね。

中村 で、先生は、全国 SLA の機関紙の創刊号を、お読みになったとかって、わくわくしたとかってお書きになっているんですけれども⁽¹⁸⁾、その当時はまだ、そういう中央の部分とはあまりかかわりは無かった？

今村氏 うん。全然無いね。全然無いって、松尾さんとか、滑川さんとかっていう個々のつながりはあったけれどね、まだ直接、SLA との関係は、機関紙を読むっていうくらいの話であって。

中村 松尾先生とはどうやって出会われたんですか？

今村氏 松尾さんとはねえ、松尾さんが、うーん、どっかあれ、書いていると思うんで、詳しいことはまたそれあたりを見ていただければいいと思うけれど、この「学校図書館運動10年の歩み」⁽¹⁹⁾ っていうこれに、書いていますけれどもね。要するに、戦後、あれでしょ？ GHQ なんかがねえ、日本の教育に、こういう点はどうなっているんですか？ っていう風にいろいろ諮問に……。で、たとえば、あの滑川道夫だとか、それから阪本一郎だとか、なんらかの形で戦前から読書運動やなんかをやっていた人たち、そういう人たちを呼んで、諮問しているわけでしょ。それで、やっぱり学校図書館をなんかつくっていくような、指導しなきゃ駄目じゃないかということ、日本側に GHQ の方で盛んに言っているわけね。ようやく、文部省が動いて、昭和23年の『学校図書館の手引』ができるわけでしょ？ で、それができてね、あと、その23年にできた『学校図書館の手引』の講習会を文部省がやっているわけ。あの、千葉の・・・

中村 鴨川。

今村氏 それから奈良の天理ね。

中村 はい。

今村氏 これ2箇所で行っているわけね。それは単なるその文部省の出す手引の普及講習会ですよ？で、その時に、ただそれだけで、大変な人数が両方で集まっているわけだから、これだけで終わらせてしまうのはもったいないじゃないかということ。

中村 先生はその時に行かれたんですか？

今村氏 いや、僕は行ってない。その時に松尾さんが、その2つの奈良と千葉の両方にね、働きかけてねえ、これを機会にして、集まっている人たちでねえ、全国組織をつくろうじゃないか、そして学校図書館運動を盛り上げようじゃないかという提案をやって、それで、そこから各都道府県に、ポツン、ポツン、ポツンと、[学校] 図書館協議会ができて、で、全国的に、まとめ役の、今の全国 SLA ができてくるわけね。それが昭和25年でしょ？で、その運動をやっている最中に、松尾さんが、僕らの近くの立川市のね、今の[東京都立]立川高[等学]校ですよ。あそこへ来て、やはり学校図書館運動を盛り立てていこうじゃないかという、呼びかけをやったんですよ。その時に随分、体育館いっぱいの人々が集まって。で、僕もその時にはじめて、松尾さんとは話しているわけね。

中村 それは、あの PTA というか、両親たちが集まったんですか？教員だけですか？

今村氏 うん？教員、教員。教員だけ。体育館いっぱいになるくらい。

中村 その、あの多摩周辺の教員がいっぱい？

今村氏 そう、そうなの。だから、当時やっぱりね、特に多摩地区は、大部分のそこへ集まった人たちは、子どもの読書っていうことをやっぱり考えていたと思うんですよ。で、非常にそれに関心があって、集まってきていた……。だから、社会科の指導とかそういうことは、やっぱりその当時の人たちはあまり考えていなかった。要するに、学校図書館づくりとか子どもの読書とかいうことを……。少なくとも多摩地区ではそうですよ。

中村 松尾先生はそうやって全国いろいろなところで、講演というか、運動のための働きかけをしてらしたんですか？

今村氏 ええ。結局、一番多いのは、ちょうどその千葉と奈良には、全国か

らかなりの人数が集まってきていたでしょ。だからそこへ呼びかけて、そしてそこで核になるような人たちを皆、捕まえているのよね。で、その人たちが、うーん、たとえば大阪へ帰って大阪で組織するとか、名古屋で組織するとかしてね、昭和20年代かな？学校図書館法ができるのが昭和28年だから、その以前にね、すでに27都府県で、学校図書館協議会というのが結成されているんですよ。だからそういう点では非常に運動家でもあったわけ。それは勿論一人だけじゃなくて、何人か……。ただねえその当時、僕は今でも感心しているのだけれども、松尾先生は、[目黒区立] 緑ヶ丘小学校というところの先生だったのね、で、ほとんど学校を空けることが多いから。そうやって組織づくりで。で、その時に、その当時の校長はね、「いいよ君、松尾君、それは大事なことなんだからね、学校の方みんな空けちゃっても構わないから、存分におやりなさい」って言って。だから安心して、ほとんど学校空けっぱなしみたい。そういう校長がその当時いたのよね。考えられないでしょ？そういうことで、あっちこっちでいろんな人に来て、核をつくっていくのよね。君は少し学問的に学校図書館を勉強して戻ってきてくれということで。だから、いやあ、あなたはその地方で組織を何とかしてくれないか、という働きかけをしたり……。人によってね。だから、親分肌の人だった。ある意味で非常に包容力があるから、考え方の違いがあろうがなかろうが、そんなのはほとんど問わず、一緒に運動していこうじゃないかという働きかけをした人だったね。やがて、昭和28年の学校図書館法をつくるということに。文部省だけじゃもうほとんどあてにならないということで、法づくりに立ち上っていくわけですよ。

中村 文部省があてにならないというのは、松尾先生が仰ってたわけですか？
今村氏 うーん、松尾さんも、カンカンになって、ここへ書いてるよ。「10年の歩み」かなにかにねえ⁽²⁰⁾。文部省は何もやらないんだもの。だから、当時の担当官で深川 [恒喜] さんという人が、非常によく動いてくれたけれども、うーん、ここでも深川さんに文部省の中でもっとねえ、自分だけねえ、承知してたってしょうがないんだよね、周囲を説得する力は無いのかってねえ、随分叩いて書いてますよね、ここに。

中村 はい。

今村氏 法の、学校図書館法に関しては、芦谷〔清〕君あたりから聞いていると思いますが、学校図書館法の成立については、いろいろ難関があったんだよねえ。その辺は芦谷君から聞いていると思いますからふれません。

中村 じゃあ、先生はあえてその運動の中に入っていったというよりも、勉強しようっていう方向性だったんですか。

今村氏 そうそうそう。その在学中は、もっぱら。慶應でね、僕を一番指導してくれた、学校図書館を専攻していたのが、ハナ・ハント (Hannah Hant) っていう女史。僕ははじめっから、なんで慶應に来たかっていうとその問題を抱えているからだ、ここを卒業したらまた戻って学校図書館運動をしたいんだってはっきり表明していましたからね。で、僕ら1期生はそういう人たちが多かったんだよね。で、今、国立国会図書館で活躍している人たちは、やっぱり、国立の図書館がどうあるべきかってことをね、それから、専門図書館とかねえ、それから公共図書館とか。公共図書館はわりあいになかったなあ。専門図書館とか大学図書館が多かったんだね。で、そういう人たちは、それぞれ、経験してきて、このままでいいのか、これを打開するにはどうしたらいいのか、っていうんで慶應に来ていたんだね。だからそれぞれつく先生が。ひととおりは皆、授業に出るわけだけれども、特にゼミみたいにつく先生が違っていたという……。そういうようなことでね、学校図書館法の成立のところまでは、勉強もっぱらなんですよね。ただねえ、僕は、今から考えると、何て言うんだろう……。何かねえ、違和感みたいなものを覚えて、一時期ねえ、〔昭和〕33年でしたわけ？あの学習指導要領改訂と同時に。

中村 はい、33年です。

今村氏 なんていうの？義務づけしてね、いわゆる拘束力をもたせるという性格のものに、学習指導要領が大きく変わっていく時代でしょう。で、その時に、文部省が、その同じ年かな？昭和33年だね。児童図書の選定っていうのははじめようと……。これはとんでもない、戦時中のね、思想統制と同じようなことにつながるっていうことで、出版界をあげて、図書館界も勿論そうだけれども、反対運動があって、それをつぶしちゃったわけ

ですよね。と、同時にねえ、やがて今度、文部省の方は、学校図書館の教材センター論というのを、打ち出してきているわけ。あの当時に出た手引書なんかには、そういうのが出てくるでしょう？

中村 はい。

今村氏 僕なんかはそれに対して、反対をあちこちに書いているんですよ、討論もしているし⁽²¹⁾。それから文部省の担当官とも直接やりとりして。で、それはねえ、今で言えば、随分おまえ変な話だなあとと言われるのだけれども・・・僕はさっき言ったようにね、資料センター的な性格と、それから読書センター的な性格と、両方を学校図書館が必要だということ・・・を、社会科の教師あたりの認識から学んできているから、それを頭から否定するわけじゃないけれども。そういうわけでしょ？指導要領の、何か国定化みたいな。それから、文部省が図書選定を言い出して、まあそれはくいとめたけれども⁽²²⁾。というような情勢の中で、教材センターという言葉で全国に広げられたら、非常に危険だと。教材までね、全部文部省がチェックしていくようなね。だから、そういうチェックされた資料の集まり、集積所であるような学校図書館にしたくない、ということで。資料センターならまだいいんだよね。教材センターというようなことで打ち出してきているから、これには反対論を随分。それから、やはり、まだねえ昭和30年代初期でしょう？学校図書館があちこちぼつぼつできあがってきている最中でね、ここはやはりまだ戦後の貧弱な時代だし、子どもの優れた本もあまり出ていない。それから同時にねえ、あれが出てきているんですよ。俗悪な、マンガ雑誌だとかね。

中村 ああ、恐怖読み物だとか。

今村氏 そうそう。特に雑誌ねえ。30年代くらいは、月刊雑誌でね。今はあの『ぼくら』だとかね。『少年サンデー』だとか。あ、それは後だ。今の週刊誌になったのは、昭和36年だ。昭和36年くらいから週刊誌になった。その前から、かなり俗悪なマンガを中心にした子ども雑誌や単行本ががいっぱい出てね、世の中がかなり問題にしていたわけね。そういう時期だからこそ、それを叩くのは簡単だけれども、叩くだけじゃなくてね、やっぱり優れた本を紹介して、売れるようにしていくっていうことをね。そうすれ

ば出版者にとってはたいへん励みになるし。親や子どもの手に、できるだけそういう優れたものを渡していく。そういうことで、俗悪な児童図書の被害をくいとめていこうという考えもあったわけね。だから、学校図書館はやはり、今一番大事なのは、子どもの読書へ戻っていくってことだろうと。まだスタートしたばかりのところね、教科で役立つような本ばかりをね、並べちゃったら、子どもなんてそっぽ向いちゃう。

で、教科は教科で、学校図書館を必要とするようなカリキュラムじゃなくなってきたでしょ？33年からはね。いわゆるあの経験学習を批判して、そして今度は、急速に体系化学習を33年からの指導要領は打ち出して。だからもう子どもが問題なんですね。学問の体系があるのは当然の話だけれども、その学問の体系をそのままに子どもたちにもっていけば体系論が構成できるっていう安易な構成じゃないんであって。やっぱり子どもは子どもの認識の体系があるわけでしょ。そこに合わせてねえ、学問の体系を組替えていかなきゃいけないはずなんだよね。それではじめて、カリキュラムっていうのは、できていく。3つばかり今、あげたけれども、そういうような理由で、文部省が言っている学校図書館の教材センター化には反対するってね。これ、学校図書館の機関紙(『学校図書館』)なんかにも随分書いたりしているんですよ。

中村 そのセンター論っていう、各種センター論っていうのはいっぱい出ますけれども、それっていうのは文部省の側はどういった意図でどうして出てきたんですか。

今村氏 うん。どういう意図……。それはひとつにはあれでしょうねえ。30年代に入って、多くの人たちが指摘してきたのはあながち間違いではないと思うけれども、たとえば33年に出た指導要領ね。これがさっき言ったように、教科の体系的な指導をするっていうので、180度転換してしまっているでしょ？要するにそれが詰め込みやなにかに走っていくわけだけれども。結局ねえ、そういう状況の中で、学校図書館は窒息していくわけですよ。だって、学校図書館はねえ、中には盲腸だという人もいるくらいで。確かにそう。あんなの無くたって一向に構わないわけですよ、ただ学問を体系的に教えていこうっていうことで。そういう状況に合ったっていう

こと。いわゆるその学校図書館の曲がり角論なんていうのが、盛んに出てくるわけですよ、この時期にね。で、今のままじゃ学校図書館は窒息するんじゃないかと、それでそれを活性化するにはどうしたらいいかと。その一環として文部省は、教材センター論を打ち出してきている。学校の教材センターとして生き延びていくという。

中村 文部省側は一応生き延びさせようという気持ちはあったと。

今村氏 うん、それはそうだね。

中村 殺してしまおうとは思わなかったと（笑）。

今村氏 それは、もう（笑）。それは、法の上では100%、[学校図書館法] 第3条に置かなければならないとなってるでしょ？そりゃねえ、どんな官僚でも覆すことはできないのであって、つぶそうなんていうことは無かったでしょうけれども。ただ、熱心に育てようっていう意欲は……。だから40年も司書教諭を置かないできているという。

中村 えっと、担当っていうのは、深川先生と、あとその後……。

今村氏 えっと、この間亡くなった、井澤〔純〕さん。

中村 はい。そのお二人と、先ほど、文部省に行ってセンター論反対でいろいろを話し合ったっていうのは、井澤先生とですか？

今村氏 いやいや、深川先生の時代。深川さんとも親しかったから。『学校図書館の手引』が23年に出たね、35年にも出ているし⁽²³⁾、手引を何回か出しているんだね。それに僕が関わったのは、深川さんと知り合いだったからね。

中村 で、センター論について何か深川先生に言うと、深川先生は何て言うんですか。

今村氏 だからね、ひとつが、曲がり角から脱却するためにね、なんていうの？資料センターじゃない、教材センターっていうと、指導要領自体とカリキュラム自体がね、学校図書館なんか必要としないんで。たとえね、あの当時もそんなに優れた本がたくさんあったわけではないけれども、でも出ていたからね。そういう教科の学習で使えるような本を並べていったらね、子どもからそっぽ向かれるということがひとつね。子どもが今一番楽しんで読んでいるんだと。だから子どもの自由な……僕は読書センター

とか文化センターとかいう言葉を使って反論したのだけれども。それからもうひとつ、世の中、社会の人々は、学校図書館に何を望んでいるか。やっぱり子どもの読書が低迷している、それから俗悪なものがいっぱいできていると。それから子どもを守りたいっていう意欲が多いので。それがねえ、学校図書館が、今でも僕はそう思っていますけれどもね、司書教諭もないひどい学校図書館がここまでどうにか生き延びてこられたのも、やっぱりそういう社会的な、そして、特に父母たちの、子どもの読書を支えてくれるという期待がね、学校図書館をここまで支えてきた。

中村 それを言うと、深川先生はなんておっしゃるんですか。

今村氏 いや、参ったな参ったな、と（笑）。まあそういうことでね。あの人はあの人だね、いろいろの考えがあるんでしょう。立場もあるし。直接そこで話をしても、それで文部省を転換できるなんて、とうていそんな期待できませんね。そんなこと考えてないね。

中村 センター論自体は、深川先生ご自身のものだとは思いませんか？もつとどこか大きなところからきている。

今村氏 うーん。このねえ、センター論についてはね、その当時、深川先生の教材センター論についてはね、東大の裏田〔武夫〕さん。そう裏田さんがね、真正面から、この文部省の教材センター論は違うぞ、って言うてるんですよ、書いてるんですよ。持ってくればよかったなあ。何号だったかなあ。巻頭論文に書いているから⁽²⁴⁾。

中村 はい。

今村氏 裏田さんあたりも、教材センター論、資料センター論、呼びかけるのもいいけれども、自分たちが今まで外国なんかで見してきたのも、こんなじゃないんだと、裏田さんなんかも指摘してきている。と、その辺で異論もいろいろ出ているから、ちょっと見ていただきたいね。

中村 深川先生ご自身のアイデアだったか、っていうところにちょっと興味があるんですけども。

今村氏 いやー、そうじゃないねえ。

中村 深川先生っていうのは、そういうのをご自分で考え出して、スローガンを掲げるような方ですか。

今村氏 うーん。そうねえ。

中村 あの、深川先生の、戦後学校図書館史における位置付けっていうのは、やっぱり非常に重要だと思うのですが、たとえば松尾先生だったら、運動の旗振り役だったというのが、明らかになっているところがあるかなと思うのですが、深川先生がどういう意義をもっているかということ、ぜひ、深川先生をご存知の方にうかがいたいんですが。

今村氏 ただね、深川先生はアメリカの学校図書館論あたりをかなり勉強していたからね。おそらく深川さんはその当時から、アメリカあたりのね、学習センターとしての学校図書館という考え方は、もってはいたと思う。それは勉強してね。それで、深川さんは、教材まで文部省がチェックしていこうと・・・それは、そんなのは深川さんも考えないと思うんだね。あの人自身はそれでも、文部省全体としてはね、どうするかわからない時代ですからね。だからそれを僕らは非常に警戒したと。それと、さっき言ったようにね、そんなことよりも子どもの読書ということを中心に考えていかないと、世の中の要請やそれから父母の要望にきちっと答えていかなきゃ、学校図書館自体が滅亡しちゃうという認識があった。決して曲がり角じゃないと、曲がり角だと言うならそういうことをもち出してきていること自体が曲がり角だということで反論してね。で、もうちょっと、これを続けていて。僕も今日来るときにちょっと電車内で見ていて、これかな？「四半世紀の学校図書館」。あれの中で、やっぱり、当然将来はそういうことが大きなビジョンとしてあがってくるだろうし、いわゆる資材の管理ということじゃなくて、インフォメーションの保管ということよね、で、図書館は動いていくに違いないということは、ここで書いていますけれどもね⁽²⁵⁾。

中村 ちょっと戻るのですけれども、学校図書館法が成立した時の、期待っていうのは、現場にいるとどういう風感じられたものでしたか。

今村氏 いや、学校図書館法が成立したときは、僕は学生だったから、だからそういう動きがあることは知ってはいたけれどもね、直接的じゃないわけよね。ただねえ、これ今でも問題になるのだけれどもね。たとえば図書館法ね、公共図書館では、必置義務は入っていないでしょ。で、学校図書館法では、3条に入っている。これどっちがいいのか。必置義務の場合は、

形だけ、全国で100%の学校に、4万の学校にね、置かれるけれども、それでいいんだろうかと。で、公共図書館の方は、やる気があるところは、自治体は、つくっていくわけでしょ。やる気の無いところは依然として無いでしょ。そういうことはね、考えていたね。

中村 当時ですか？

今村氏 うん。

中村 うわー。すごい。

今村氏 25年にね、僕らが学生の時にね、その図書館法ができたから、随分違うなあっていう個所が何箇所もあったわけよ。それ、どっちがいいかなあっていうねえ。今はやっぱりね、図書館法自体改正して行かなきゃいけないと思っていますけれどもね。

中村 学校図書館法ですか？

今村氏 いや、そうじゃなくて、図書館法。図書館法ももう手をつけていくでしょう。学校図書館法もようやく附則撤廃に近い状態になったし、盛んに、図書館法についても、論議は出ているからね。

中村 じゃあ、先生は最終的には学校図書館法は設置義務ありでよかったという風にお考えなんですか。

今村氏 いや、あの時点ではね。結局、司書教諭もなんにもいないからねえ。あれ、そのままで終わったんじゃないかっていう気もするのね。法が無かったら。昭和25年ですからね、図書館法は。学校図書館法は28年ですからね、やっぱりそういうのはにらんで動いていたのかなって感じはしていた。公共図書館なんかはひどかったからねえ。あの、ユネスコの報告書を見ると、当時ねえ、日本は図書館のバーゲンランドだって書いてある⁽²⁶⁾。ああいう状況だから。

中村 で、先生が目黒〔区立第〕十中〔学校〕でお勤めの頃に書かれたものを読みますと⁽²⁷⁾、事務員さんがいらっしゃるんですね、かつ先生も週2回授業なし、図書館専任。で、本格的なレファレンスサービスなんかもやってらして。それは目黒十中では可能な条件があったのですか。

今村氏 あ、あのねえ、目黒十中っていうのは、これもちよっと特殊なんですね。目黒区に、〔東京〕都立大学の附属高〔等学〕校があったでしょ。で、

目黒十中はすぐそこから100メートルも行かないところに建っているんですよ。その目黒十中ができた時にね、大部分の教員は、その都立大学の附属高校の教員から、下りてきている人が非常に多いの。全体的に、高校のような、雰囲気があって、で、極めて自由で、それから、学校の運営その他について、職員会議が教師の意志決定機関であって、っていうようなことでね、やってきたし。で、制服なんかも、とうとう無かったの、子どもたちにね。で、子どもの自由にさせておけばいいって、そういう雰囲気の学校だったし。それから、教員もねえ、非常に授業に関して、自分の教科に関してはよく勉強してね、力をもっているのね。だから、かなり図書館の本を使ったりしてね、やっているんですよ。中には、あんまり使わないような人でも、図書館から自分が本をいつか借りて行って、そして子どもに見せながら、こういう本を見てもっとこういうの詳しく書いてあるよとか、これあたりこんな本で見に来いとかいうようなことを指示したり。社会科の歴史の教師なんかは、かなり調べさせてね。で、そういうようなことを自由にやってたんですよ。そういうんじゃ、教員の質も高いし、それからもうひとつはねえ、あの地域はねえ、昔のねえ、・・・

中村 お屋敷街みたいな・・・

今村氏 うん、高いんですよ、子どものレベルがね。だから、受験なんかでもね。たいして受験勉強なんかあまりさせないんですけれどもね、あそこでは。で、3年生に面接してそれぞれ希望を聞いて、皆にどこへ行きたいのって。あの当時は都立大学の附属高校というのは、非常に難しかった。でね、50人くらいが毎年、目黒十中から入っていっちゃう。よその中学がねえ、今ぐらいの時期になると電話をかけてきてね。今年はおたくの中学は何人くらい都立大附属へ送るんだと。それによっちゃ危ないから、うちの中学の子を他校へ受験させるとかいうようなくらい。生徒の自治活動もきちんとしているわけね。だから、そういう・・・

中村 恵まれた・・・

今村氏 あの当時、マンガが俗悪だと騒がれていた時代ですからね。昭和36、7年頃かな？「子どもマンガについて」っていう、10人くらいでうちの中学生がレポートにまとめて、カラーのスライドにしてね、目黒区で発表し

たんですね。そうしたら、それがもう大変な好評で、日本全国それを貸してくれっていうんで、持って行ったり。それから、この子どもの俗悪なマンガを取り上げて、当時盛んに動いていた羽仁説子さんが会長をやっていた、日本子どもを守る会で、さかんにそれを取り上げて、俗悪なマンガに子どもたちが侵害されているというけれども、必ずしも悲観的になることはない、こんな健康的な子どもたちも育てているじゃないかっていうんでね、それであちこちにそのスライドをね、回して。そしてその中でね、手塚治虫に対してだけは高い評価をしているんですよ、子どもが。で、他のマンガをかなりこっぴどく叩いているのよね。で、手塚治虫にも来てもらって話を聞く、というような、学校ですからね。だからちょっとねえ、他とは雰囲気かなり違うわねえ。そのせいか、かなりあそこでは、子どものそういう自由なリーダー活動と、ただ読んで楽しむようなだけじゃなくて、十分彼らはそうやって批判できるという。ただ中学生は、うっかりすると悪をただ叩くっていうようなことだけで終わりがちだけれども、そうじゃなくていいものはいって言うんだって、きちんと評価しているっていうんでね。大変あちこちから評判をね。

中村 週2日図書館専任だったのは、校長先生が許してくださったのですか？

今村氏 うん。それとねえ、なにしろ。

中村 でも単なる校務分掌ですよ。司書教諭じゃないですよ。

今村氏 うん、じゃない。校務分掌。結局、僕はねえ、図書館大事だから、図書館の方を重点にやって欲しいと。だからあの当時、図書館担当者はね、だいたい教科の授業をひとり分、担当するでしょう。それと同時に学級担任もやるでしょう。で、学校図書館と、3本立てになるわけよね？それでおまけに3年生担当になると、受験指導がでてくるでしょう？ということ。これじゃ図書館もできないだろうからっていうんでね、在籍していた9年間、3年生は一度も担任しない。1年2年は担任をしてたが。それだったら、かなり図書館に時間をさけるからね。それを、やっぱりあの職員会議で承諾して、校長は大変結構だっていうんで。ひとつには、大変立派な図書館ができていたのでね。あのベテランの専門家が設計して建てたものだから。金も大変かけて。だからそれをフルに活用していこうっていう気

もちもあつたんでしょね。

中村 事務員さんはPTAが？

今村氏 ええ、PTA。あの当時はね。これはずーっと、少なくとも僕が在任中にはいましたね、9年間。

中村 前任者っていうのは誰だったんですか？

今村氏 あのねえ、それまで図書館が無かったのね。

中村 じゃあ、呼ばれて、期待されてっていう状況だったんですか？先生は設計から携わった？

今村氏 うん、そうなんだよね。じゃ、誰に設計してもらったらいいな、っていうんで、僕が、公共図書館の建築の専門家の元都立深川図書館長の秋岡悟郎さん、それから学校図書館の方の専門家は佐野〔友彦〕さんだったから、その2人を頼んでね。で、少なくとも、区役所が設計してきた試案の4倍くらいのものを計画した。だけれども、子どものために、ちゃんと、しっかりしたものをつくってもらわなきゃ駄目だっていう、教員の方が足並みそろえていたからね。僕は別にあおったわけではないけれども、金の方も倍PTAが集めて、借財をしたりして。で、あの当時は、もう日本ではめずらしい独立建物のしっかりしたものができたんですよ。そういうような学校だったの。今ではちょっと考えられない。

中村 先生が、そうやって秋岡先生や佐野先生を推薦されて、その要望が尊重されたというお話だったのですけれども、慶應出てきたら、専門家扱い、とかそういうことがあったんですか？

今村氏 うーん、いろいろの方面の専門家と顔見知り援助してもらえる。そういうところもあったから。こちらもね、理由をちゃんと述べて、だいたい基準数値から言っただけ⁽²⁸⁾、これだけの子どもを抱えてね。えーっと、各学年にA B C D E F G・・・H組まであったから、だから、8×3倍、24学級あった。1学級が60人以上でしょ、40人学級じゃないからね。その人数だから、少なくともこれだけの子どもたちに対してこのくらいの面積が必要だとされる。で、区の試案のひと教室と同じくらい面積じゃ、山の中の少人数の分校と同じだっていうんでね。とうていこんなものをつくったって役に立たないって言って、PTAにもそういう説明をしたわけよね。

中村 でも先生はやっぱり、なんて言うか、尊敬されていたっていうか、尊重されていたわけですね。図書館のそこにいるっていうことで。

今村氏 今度PTAの記念行事で学校図書館をつくるっていうんで、かなりの募金運動をしているから、誰か来て推進してくれないかっていう。で、目黒ってというのはね、松尾弥太郎さんが元いたところ。それで、松尾さんのところへそういう話があつて。松尾さんは、じゃああんたそこへ行ってみたらという。本当は平凡社にも話があつて。平凡社ではその当時、子どもの百科事典なんかをつくっていたでしょう。そういうような仕事で学校図書館へ貢献するのほひとつの方法だよ、っていうんで、松尾さんは幅広い人だからね。で、僕はやっぱり直接現場でやってみたいからっていうんで。そいじゃあ目黒にしようということになった。

中村 全国SLAに入るっていうお話もありそうですが、なかったんですか。

今村氏 うん？

中村 全国SLAで働いてみないか、なんて。

今村氏 うん、それは全然ない。

中村 そうですか。

今村氏 元々現場で、できる限り現場って。直接子どもの実態やなにかつかんでね。松尾さんは、資料をできる限り集めておきなさいよ、なんて言っていたから。そういう子どもに関する資料なんかをいろいろ集めたりしながら、やってきてるわけよね。

中村 ちょっと戻るんですけども、先ほどのお話なんですけれども。昭和33年に指導要領が改訂されて、学校図書館が下火になっていくっていうような話を先生がお書きになっている中で、図書館の資料を使つての学習指導は、他の教員にだと思つたのですけれども、困難さを印象づけてしまったというような表現があつたのですけれども。それ、1975年に先生が書かれていますのですけれども⁽²⁹⁾。困難さというのは、その時イメージして書かれていたのは、どのようなものだったのですか。

今村氏 あのねえ、ひとつにはねえ、学校図書館自体が、教師の学習指導に使うのに役立つような本だとか、それから数量ね、質的にも、それをまだ備えきれていないということね。だから、必ずねえ、昔からひとつの学校

の中でもねえ、図書館資料を使って幅の広い豊かな授業を展開してやろうっていう教師はいるんですよ。けれども皆彼らは失望させられるわけ。図書館へ行ってみると、もうまったく、量的にも足りないし、質的にも足りない。だから今のようにねえ、今でもそうだけれども、孤立的なひとつの学校図書館で、校内の要求を充たしていこうなんていうことは、そういう図書館というのは、存在し得ないわけですよ。で、どんな大きな図書館だって、1館で大勢の人の要求を充たしていこうなんて、それは不可能なのであって、だから図書館協力というのかな？それからあなたもご存知だと思いますけれども、アメリカではリソース・センターなんていうのを設けてね、大量に必要な本を学校へ貸し付けるでしょう。だけれども日本じゃそういうのを望めないから。で、これ、イギリス・ロンドン市あたりを見るとね、公共図書館が管内の学校図書館なんかに対してもね、資料をどんどん渡しているんですよ。それは何ていうのかなあ、州がねえ、学校図書館を援助するための費用っていうのを公共図書館にひもつきで渡しているんですよ。で、それで資料等を買って、学校図書館などへ提供している。これなら日本でも可能だからね、いわゆる親図書館ですよ、親図書館をもっていかない限りは、1館だけで教師の要望や子どもの要望に応えていくなるとそれは無理だって、前からそれは主張しているのだけれどもね、まあそれが進んでようやくこれがそういう方向に動き出したでしょ。で、そういう困難さがね、学校図書館自体・・・。

それと、もうひとつは、まああの、大変学校図書館の資料なんか使ってやる授業っていうのは困難なカリキュラムになっているでしょう。そんなことやっていたら終らないっていうようなね、社会科なんて、この單元の中で教えなければならぬことが終らないっていうね。教科の教師は皆そういう問題を、学校図書館自体もそういう問題を。

中村 その2点。

今村氏 だからついでだけれども、全然、話はあれだけれども。今度のねえ、総合的な学習 [の時間] っていうのが入っているでしょう？これはかつて僕が終戦直後に経験してきた、いわゆる経験学習、こういう方向へ走ってしまうと、また前の二の舞になってしまうでしょ。こういう点を十分にお

さえていかないと。うっかりすると、いわゆるいろんな役所とか、街の、地域の機関を訪ねて調べるとかね、それからインターネットでねえ、調べていくっていうとか、極めて安易に考えているけど。本なんか使う、図書館なんか使うというのは、あんまり考えられていない実践が多いのよね、今、総合的な学習やなにかで出てきているのはね。だから、これやっぱり前の経験主義の学習を十分考えてスタートしていかないと。だから学校図書館もうっかりすると、今あれでしょう？いわゆる調べ学習とか総合的な学習なんていうのが出てきたから、学校図書館のまさにチャンスだなんていうような景気のいい声が聞こえるけれども、これあたりも十分に図書館自体も考えていかないと、昭和20年代の二の舞を繰り返すことになるからね。これは、直接、今、あなたの話とは関係ないけれども。

中村 いえ、勉強になります。

今村氏 現在はそういう危機を、あるいは困難さをね、感じていますよね。

中村 さきほど、公共図書館から借り出して、なんていうお話が出たのですけれども。それでネットワーク論とかも、先生、結構早い時期から言っておられますけれども⁽³⁰⁾、そのアイディアっていうのは、先生が実践の中で、実際に公共図書館にお世話になったりしていろいろ借りたりしているし、そういった実践の中で得たものなのか、それとも図書館学から学んだりしたこともありますか。

今村氏 うん、それもある。それは基本的に大きいと思うよ。

中村 じゃあ結構、学術研究としての図書館学っていうのも、常にいつも、何て言うんだろう。キーポイントというか、していた。

今村氏 まああの、うーん、それほど大げさなことを言えるかわからないけれどもね、いわゆるネットワーク論だとか。だから1館主義っていうか、孤立主義っていうかな。そうでしょう？学校図書館がネットを組んで他館との協力っていうのをなかなかやっていない。公共図書館に行ったら、援助は無理じゃないかっていうそういう人もいるけれどもねえ。図書館法にはっきり、公共図書館は学校を援助するっていう任務がちゃんと規定されているし⁽³¹⁾、それから今、公共図書館、利用率が下がっちゃってるでしょう？で、そういうような時期にねえ、やっぱり子どもたちのために学校図

書館に大量に本を貸していくっていうようなことで、回転率も上がるし。この間も僕はそういうような話をしに、東京多摩市の図書館に行ったんだけど。多摩市ではやっている。多摩市の図書館ではね。それで、僕が多摩市の中に学校が何十つあるわけだから、そういうところで、一斉に言ってきたら困るだろうって逆に皮肉を言ったら、いやねえ、40学校があっても、40学校がいっぺんに言ってくるなんてことないと、4つや5つ言ってくればいい方でね、そういうのを大事にしたいと。で、それが10になり、20になりして、資料が足らなくなってきたりするとね、これだけ資料が足りない、っていうんでね、図書館予算を私たちは確保しますよ、ってね、公共図書館は言っているわけね。そういう図書館だって出てきているわけだしね。ただ、まあ日本全国で2,300くらいですか？公共図書館があるのがね。日本国中の学校が、公共図書館の直接のお世話にはなれないかもしれない。だけれどなれるところからどんどんやっていかないとね。そして、それが公共図書館を育てることもなるんだから。はじめはねえ、学校図書館から公共図書館に本を貸すっていうようなことは、これはもうほとんど考えられないですよ。ちっぽけな図書館なんだから。大きい公共図書館から学校図書館が借りるというような、一方的なワンサイド・ゲームみたいになっちゃうようなねえ、動きは確かにあるけれども、それは公共図書館は十分承知しているはずだしね。それでいいんだと。で、せいぜいあと学校が協力できるのは、たとえば夏休み中のねえ、子どもたちにこういうような本を学校で推薦しましたよとか、子どもたちが読みたがっているのはこういう本だとか、そういうことをね、公共図書館にリストをつくって渡してやればね、公共図書館は大勢の子どもが来てね、本の奪い合いに困った、なんて騒がなくてすむでしょ。そういう協力で十分なんだっていうことをいつも言ってるけれども。

でも僕はどっちかっていうと、スタートしたみずほ[文庫]の時にも、青梅の図書館から借りたっていうことと、もうひとつは、講談社。講談社が当時、学校図書館に巡回文庫っていうのをやっていたの。昭和20年代かな。で、かなりのたくさん本をね。で、行ったらば、いや、先生の方は遠いからっていうんでね。23区内だけサービス考えているんで、そんな方

まで配送することを考えてない・・・っていうんでね。じゃあ僕取りに来るからって言って、子ども10人くらい連れて、皆、風呂敷持って担いでね、来たんだ。むこうも非常に驚いて、じゃあこういう形でやってくれるんなら、何冊でもお貸ししますっていうんで。新しい本をたくさんねえ。その時は学習っていうんじゃないでね、子どもが喜んで読む本っていうのをね。目黒区でも、目黒区立の図書館。あそこはいろいろやってくれた。で、新宿でまいっちゃったのはね、新宿はもっと進めて、定期的にね、バスや車を巡回させてね、学校図書館へと思ったのよ。それを盛んに公共図書館に働きかけたんだけど、結局、車が混んで通れないのよ、あの辺。だから、とても定期的に巡回するっていうのが、極めて困難だったんだ。ホントにやる気があればね、困難でもないんだろうけれども、まあためにやってみると、1日に何校も回れないっていうのね。そういうような状況だったの。で、それはそれで結局おじゃんになっちゃって。直接公共図書館に取りに行って借りるっていうんでね。

中村 そのアイデアを話し合ったのって、1970年代頃ですか？60年代？新宿の頃ですよ、それは落合第二中[学校]の時ですか？それとも四谷[第一中学校]？

今村氏 いや、四谷ね。落合っていうところは、新宿のチベットで。まだねえ、公共図書館との関係が無かったのね。で、四谷の時には、僕は、新宿区の公共図書館の運営監査委員を頼まれていたのね、そういうこともあったから、新宿のね、もっとも小・中合わせて100超すんだ、学校がね。そこへ巡回させていくっていうのは、1台や2台の車じゃどうにもならないでしょう。せめて要求のあるところからはじめたらどうだっていうことを言うてるの。だけど、むこうは役所的な考えだから、全部は始めるのにはどうしたらいいか、検討している。結局、それはそうよ、100校以上あるところをぐるぐる必要な本を要求されて回っていたら、それだけでも図書館員を2人も3人もの手間がかかっちゃいますね。だから近くの分館から借ると。分館同士はまあ、あるいは本館と分館、公共図書館同士はね、本を動かしているんですから。

中村 はい。あの、だんだんまとめて行きたいと思っているのですけれども。

先生は、たびたび子どもの読書の問題と、あと、子どもの生活とか環境とかの変化について話してこられているのですけれども、で、今、今度また大きく変わっていきそうですよね、たとえばパソコンが入ってきたとかいう問題で。そういった問題について今はどうお考えでいらっしゃるんですか。

今村氏 うーん、これは難しい問題なんだけれどもねえ。やっぱりねえ、一時期には、マンガが隆盛していて、マンガにみんな子どもをとられてしまうだろうっていうことで、随分問題になりましたよね。

中村 マンガ、テレビ、ゲームとかそういう。

今村氏 特にテレビね。テレビとマンガ。で、事実、テレビなんかが出てくると、読書をする時間がね、減ることは事実ですよ。だけれども、まったく読書が不可能じゃないんで。僕は落合にいる時に、その対策として、子どもを調べてみるとね、忙しくて時間が無いよっていう。ひとつはテレビを見ている、それからもうひとつは学習塾に通うっていうことで。家に帰ってからも。学校はもうぎりぎり4時まで授業を組んでいるでしょう。で、読書時間が無いっていう。それで、昭和30、いや落合だから40年代・・・41、2年くらいからかな？朝の10分間読書運動っていうのを起こして⁽³²⁾、これでねえ、自信もったのは、その期間中、学校で朝10分間本を読むでしょう。そうするとだいたい4、5ページくらいしか読めないのね。ところが子どもは途中まで読みはじめると、その続きが早く読みたいじゃない。明日の朝の10分間読書まで待たなくて、家に帰って、結構ねえ時間をひろっちゃあねえ、塾へ行く前の10分だとか、ってやっぱり読んでいる。学校での読書では今日は何の本を何ページから何ページまで読んだっていうだけね。反省や感想は書かせない。そうやってみると随分読むし、そうねえ、やってる期間は1ヶ月の間にねえ、6冊平均くらい読んだっていう。で、まったく読まない子っていうのは、1クラスに2人いるかいらないかだ。で、大部分が、今まで本なんてあまり読んだことないっていう。小学校からずっと来てね、ここまで。はじめて本を読んだと、しかも1冊の本をはじめて読み上げたって大変喜んで書いている子もいる。それも、『子どもをみつめる読書指導』の中に、冒頭のところにね、数字やなにか出していますけれども⁽³³⁾。あの、男の子で7割近く、女の子で9割近くかな？またこう

いうのを定期的に続けてほしいって言うし。

で、あそこには書いてなかったけれどもね、僕が忘れられないのはね。1人の子がね、「考えてみると、10分間ってというようなこうやって短い時間をね、生活の中から拾ってつないでいくとね、こんなすばらしいことができるんだっていうことをはじめて知った」と。だから、細切れの時間しか我々もっていない、でも細切れでもこうつないでいくとね、こんなすばらしいことができるんだってわかったって、これが一番の収穫だっていうような、感想を書いている。そういうことも、考えてやらないといけないかもしれないよねえ。

読書の分量は、パソコンがあり、いろんなゲームなんかも出てくるし、テレビもあるし、だから、量は減るかもしれない。だけど、その読書をするっていうこと自体、これはいくらでもひっばっていけると思うんですよね。TVなど何も無い時代のように、年がら年中読むってというような風にはいかないだろうし、またその必要もないしね。で、僕は今一番問題だと思っているのは、人間っていうのは子ども時代一番本を読むでしょ？で、だんだんだんだん大人になってくると、読む量が少なくなってきましたよね。仕事があったりいろいろあるから。大人が一番読まないのであって、子どもの方が読んでいますよね。だから、ま、それが社会化現象っていうのかな、自然のなりゆきだと思うのね。ただ、それが早くきてしまうっていうのがね、それが問題だと思うんで。それを少しずつ引き延ばして、せめて高校くらいまではね。

中村 教科学習との直結が無くても学校図書館だって先生は何度もおっしゃっておられて・・・ちょっとそれは・・・。勿論、先生のおっしゃりたいことを理解した上で今うかがっているつもりなのですがそれでも。で、その読書センターとしての学校図書館っていうのは、先生の理論の中で、わりと柱みたいなものになっていますよね？で、そのある人に言わせれば、日本の学校図書館の戦後史というのは、教科学習と直結するという学校図書館の本分たる部分が、実現し得ない状態があったから、そういった読書センター論が戦後のその主流だったというような、そういった批判というか、がありますよね。それに対して、先生は、戦後直後から、読書指導につい

ていろいろと考えてこられた側として、それは違うという風にお考えですか？

今村氏 うん、あのねえ、僕は……。いわゆる学習と直結しない学校図書館が当たり前だと言っているのじゃなくて、今のね、今ってその書いたり言ったりしている時代、その年代の時期[筆者注：1960年代]。まだまださっきからあげているように、学校図書館自体が未熟だし、それから、教科の教育自体もいわゆる詰め込みから脱出できていないでしょ？こういう状況でずっときているんで、そういう詰め込みの教科に直結させるような学校図書館の蔵書構成やったりなんかして、子どもにそっぽを向かれると。子どもの全然来ない学校図書館にするっていうようなことについて、問題だと言っているのであってね。さっきのように、司書教諭も配置されてね、それも実際どのくらい力をもった司書教諭が配置されるか、これはもう問題はたくさんありますけれどもね。で、司書教諭が配置されるからといって、ただちに学校図書館が良くなると、僕は思っていないけれども、まあ、優れた司書教諭が置かれ、そして学校図書館はかなり充実し、それからいわゆる情報教育とかなんとかっていうことでね、かなり教育自体の改訂っていうことが、やかましく言われているでしょ。だからそういう中でねえ、わりあいにつながりやすい条件は出てきているけれどもね。だけれども、多くの教師はねえ、さっきのような調べ学習、あるいは総合学習っていうと、図書館なんていうのは頭に無いんだ。すぐ出てくるのは、コンピュータとか、実地経験ね。だから直接経験っていうことですか？と、いうことで、情報教育っていうと、すぐコンピュータ。だから印刷媒体を使っただけの教育なんかのことは、全然意識がおよばないということも、結構あるんですよ。だから、要するに、学校図書館を置いたっていう、戦後のひとつのねらいとしては、教科学習の大きな改編っていうことね、もっと大げさに言えば、学校教育の大きな改訂ということ、まあひとつ目指してきてはいるのだけれども。学校図書館だけがねえ、ちょこちょこ動いて教育状況全体が変わるなんていうことは、当然あり得ないことなので。

やっぱりねえ、今までを見ていると、図書館を使った学習指導なんていうのを、誰がやっているのかっていうと、図書館の教員がやっている。社

会科の教員だとか国語の教員だとかが図書館やってるでしょ。それが自分の、図書館の立場を前面に押し出して、研究授業なんかをやったりしている。それから、全国大会でも、あるいは各地で行なわれている研究大会なんかでも、そういう授業をやっている人は、皆、図書館をやっている人で、そこへ集まって参観している人も、皆、図書館の人。社会科のベテランだとか、理科教育のベテランだとかって言われている人たちが、いっぱいいるの、世の中にはね。で、そういう人たちが、そこへ来ていないわけよ。で、そういう人たちがそこへ来て見ていけば、こんな無理な資料の使い方は、ここではやるべきじゃないとかね、こんなのは、社会科教育といった目的から大きくはずれちゃってると。ただもっぱら資料をどう使うかっていう指導になっちゃってると、そういう批判がね、出ると思うの。気をつけなくちゃいけないのは、図書館を利用した授業をやるのはね、結構なのだけれども、その教科にはその教科の目的や目標があるでしょ？で、それをゆがめてまでね、図書館の資料の使い方を教えるなんていうのはね、これは一番ね、気をつけなければいけないことね。で、そういうような疑念がたくさんあるので、あるいはキツイ言葉で言ってるのかもしれないけれども。教科の方で各学校に2、3人はいるっていったでしょ？図書館を使って授業をやりたいって教師が。そういう教師を大事にして、そういう教師と結びついて、教科をやっていくならいいけれども。そうじゃなくて、全校にただねえ、図書館を使った授業をやってくださいなんていうのは、これはおこがましい話でね。

中村 はい。

今村氏 その朝の10分間読書だってそうですよ？自慢話をするわけじゃないけれども、僕は、落合二中でそれ、12、3年やったわけね。で、僕が辞めてから後も、まだ10年以上もそれが続いて。僕はそれに非常に感動したのだけれどもね。学校の創立何周年記念っていうので呼ばれて行ったらね、まったく知らない校長先生から、ああ先生、今村先生ですか、実はうちの学校まだ10分間読書やっているんですよ、って言われてね。これ、財産にしてやっていますってね。感動したのだけれども。これはねえ、今盛んに騒がれてるでしょ？10分間読書やるべきだって。で、これ気をつけなければいけ

ないのは、僕なんかやる時は、非常に慎重に。たとえば一番最初ねえ、僕が担当していた1クラスだけ、やったんですよ。半月くらい。そうすると、隣近所のクラスと一緒にわいわい廊下に出たり騒いでいる、教員が来る前だからね。で、その子どもたちがあそこ何やってるんだって、結構楽しそうに本読んでるな、って。自分のとこの担任にね、うちでもああいうのやらないかって子どもから出てきたりして。そして翌年、今度は僕の所属した学年が、全部一斉にやることにして、そうしたら教科の教師が1時間目のね、授業が非常にやりやすい、って。本を読んだ後で皆静かになってね。すぐすと授業に入れると。そんなことの為にやっているんじゃないけれども、妙な評価を受けて。そして3年目にはね、じゃあ1年生と2年生全部やろうと。1年2年やっていたら、今度は4年目にね、3年生も参加して全校の行事にしようじゃないかって職員から出てきてね。4年経ってやっと全校の運動になっているわけね。それをねえ、失敗して、うまくいきませんって言うところはねえ、職員会かなにかでねえ、いきなり10分間読書はじめたいと思っているから協力してくれと。そうすると、5分や10分読んだってね、6ページそこらしか読めないじゃないかと。こんなんでは何も役に立たないとかね。それからそんなのは漢字の5分間テストやった方がましだとか。というような反論がでちゃってつぶれちゃってるようなところが結構あるんですよ。

だからそういうようなところが、学校図書館が、司書教諭なんか誘導していく為には、慎重にやっていかなきゃいけないのね。教科の学習でも同じで、教科学習と直結していこうっていう時に、あんまりね、学校図書館の司書教諭が、新しい教育は資料を使わなきゃいかんとかなんだとか、そんなこと言ったら反発を招くだけでね、何にもなりませんよね。だから、やろうっていう教師を捕まえて、そこへできるだけサービスをして、どこからでも、いろんな資料を借りてきてでも提供してやるだとかね、そういうような慎重さが、必要だと思うのね。で、これからますますそういうことを考えていかないと、ね。

室伏武氏へのインタビュー記録

インタビュー実施日：1999（平成11）年12月17日（金曜日）

室伏氏略歴：1925（大正14）年生れ⁽³⁴⁾。1955（昭和30）年、慶應義塾大学文学部図書館学科卒業、同大学勤務を経て、1960（昭和35）年から玉川大学、1966（昭和41）年から亜細亜大学に勤めた⁽³⁵⁾。その後、常磐大学教授となった⁽³⁶⁾。

中村 まずご経歴について確認させていただきたいんですけども、慶應[義塾大学]の図書館学科の前には、教員で……。

室伏氏 そう。学校の先生、田舎で。

中村 静岡。

室伏氏 そうそう。6・3・3制の最初の中学校の先生ですよ。

中村 その経緯っていうのは。

室伏氏 だから、そこからスタートするわけですよ。

中村 では、そのあたりからうかがっても……。

室伏氏 ああそのあたりから？そうですか。基本的な問題はねえ、まあ私は田舎で、親父も田舎で、若干農業もやってて、学校の先生になれば、家も継げるからいいよってことで、なりなさいってことで、ああそうですか、ってなったんだなあ。で、学校行くわけだよなあ。先生になるためになあ。

中村 戦中ですよ。

室伏氏 そうですよ。で、終戦の年の6月に、軍隊に行きまして、8月終戦ですね、ということですね。だいたいこれが、21年くらい？そりゃあもう私どもは軍国主義の教育を受けましてねえ。で、戦争に負けたということなんです。これが、ひとつの大きな問題で。日本は戦争に負けたんだから、もう人生終わったんですね。あとは余生と（笑）。

中村 戦争に負けたから。

室伏氏 そりゃあなたたちはわからないだろうなあ。小学校からずっと戦争……戦争の教育でしょ。だから、ねえ、戦争に行くのあたり前で、ごく普通の人間なら、ごく普通にそう思うでしょうねえ。で、戦争に行く

と。で、結局負けたんだなあ。うん(笑)。人生終わりということでしょうねえ。

中村 その経験が・・・。

室伏氏 この間ねえ、話全然違うけど。慶應で、商学部の学部長もやった石坂〔巖〕さんっていう人がねえ、『文明のエトス』⁽³⁷⁾という本をねえ、私にくれたんですよ。その一番冒頭にねえ、「余生と再生」という題があって、私とまったく同じなんです。学生時代？戦争に負けたと。で、自分はこれで終わりだと。それで今度は新しい道を探すのが再生なんですよ。それでまあ、大学へ行って、まあ慶應で経済学を勉強してというような道筋なんです。いやあ、期せずして一緒になっちゃったんですね。私も同じなんだよなんて言ってね。そういうのは書かない方がいいんだけど、やっぱりそういうのははっきりさせた方がいいんじゃないですか、って言ったんですけどね。わりあいに、戦争に行った人の中には、そういう人多いですね。もう敗戦で、終わりだと。戦争に負けて、日本の国どうなるかもわからないし、いろいろ混乱して、日本の国どうなるかっていうことで・・・。まあだから、余生なんでしょうねえ、戦後はねえ。で、再生するということですな。

中村 再生できたんですか？

室伏氏 さあどうですかねえ。

中村 いまだに余生感があるんですか？

室伏氏 ああいつもあるんでしょうねえ。僕は案外だから、人生面白いですよ、余生だから。そういう点では、面白い人生だったんでしょうねえ、と私は思いますけれど。で、同時にこれ、戦後っていうのは、いろんなことができた時代だから、余計、自分っていうものをどうつくっていくかっていうねえ。再生ですよ。本当に再生するのはねえ。様々になるわけですけど。

で、うちもあるもんだから、学校終って、教員になるわけですね。新教育で、6・3・3制で、最初の中学校の先生になるわけだ。田舎でね。これは今村秀夫さんも同じじゃないのかな。今村さんも言わなかったかな。いわゆる6・3・3制で、校舎はない、教科書もない。で、食べる物は無

いし。まあ田舎ですからね、住むところはあんまり問題ないんですけれど。食料は無いし。いろんな物資も無いし。というような状況の中で、中学校がはじまるわけですね。同時に戦後っていうのはね、文芸復興なんですよ。で、児童文学で言えば、まあ明治維新ね、それから大正デモクラシーの時ね、赤い鳥運動の時ね、そして戦後なんですよ。『銀河』とかね、いろいろ子どもの雑誌が出て。で、児童文学が華やかになって行く時代ですね。で、そういう中で・・・っていうひとつ、社会的背景の中にあるんでしょうね。ひとつは、学校教育が、いわゆる生活中心主義の教育でしょ？ということなんですけれど。まあ世の中・・・あれは子どもたちは、なかなか・・・。まあ今ほどは乱れてないですけどねえ。大変だったですよ。教育はねえ。中村 何か、その当時、教育に対して哲学とかもってらして？

室伏氏 これはもうねえ。新しい教育？再教育ですよ。いろいろ、新しい教育はああだこうだって言うんですねえ。いいんですけどねえ、たまに、その当時なあ、新しい教育ってはっきりしなかったなあ。ただ生活中心的で・・・。非常にもう結局、教えることに、終始しちゃうでしょう。だから、教科書中心に教えていくという中で、出てくるということになるんですけどね。

中村 先生はその流れに、共鳴して。

室伏氏 まあしょうがないでしょう。そうなっちゃってんだから（笑）。

中村 終戦の時の、ショックみたいなものと、その教育者になるっていうことは、どういう・・・

室伏氏 まあ私はいいかげんな人間だから、そんなに切腹したりする程のショックは、それは無いですよ。職業軍人でもないし。まあ、ひとつの終わりだってことは終わりだったんですけどね。だから、先生になるつもりでいたから、先生になってっていうことですねえ。それで、そういう中で、何をしたか、子どもたちは、先生の言うことは聞かないし、食べるものもろくにないし、元気もないんだなあ。で、じゃあ、読書によって、読書っていうのは、ルネッサンスでは読書も出てくるし・・・。読書熱っていうのが、全体に高まった時代だったんでしょうねえ。で、私も、そういう読書なんかをやったらいいんじゃないかっていう風にして、たまたま、その

町で、田舎だったんですけどね、町立図書館があったんですよ。あったっていうか、これねえ、図書館の歴史で、大正時代、図書館がものすごくできるんですよ。その名残でできてね。で、町長が、じゃあ中学校の図書館を町立図書館にしたい、みたいな意気込みがあったんですけどね。結局、町立が後になるんで、できないんですけどね。結構、図書費に金くれてね、で、本買って……。

中村 町長さんがですか？

室伏氏 うん。意外に熱心だったんだなあ。

中村 お名前覚えてらっしゃいますか。

室伏氏 [小山町] 町長の湯山 [正平] という……。彼なんかわりあい熱心でねえ。結構本も買ってくれたんですよ。

中村 それが小山中 [学校] ですか。

室伏氏 うん、小山中。で、図書室つくったんですよ。

中村 それいつ頃ですか？終戦直後ですか？

室伏氏 終戦直後はねえ。新制中学ができた4月は、仮校舎ですよ。何年くらいだったのかなあ。本も無い何も無いただ教科書があるだけ。新制中学で、1年2年3年っていう風になるんだ。で、2年3年は、高等小学校の人たちが入ってくるっていう形で。で、純正は1年生ですけどねえ。で、だからその連中は、教科書は無いから、いわゆる教科書に墨塗ったやつ使うわけでしょう。よく歴史で言ってるでしょう。

中村 墨塗り教科書。

室伏氏 うん。私は1年生だったから、あの、直接経験はないんですけど。そして、新しい中学校ができるんですよ。できた時に、新しい教科書をつくって、もらって、読書を一所懸命やろう、こういうことになるんですね。まあこれは今日生きてんでしょうねえ。だからその時の子どもたちに本を与えたいというねえ。まあ、時代という流れの1コマでしょうねえ、そういうのは。やろうと思ったっていうのはねえ。時代っていうのが、そういう時代だったんですね。て、いうのは、戦後、大人も、児童文学もそうですけどねえ、本に飢えてねえ、もう飢えた時代ですよ。で、岩波 [書店] の『西田幾多郎全集』が、出る時に、岩波書店で、徹夜で並んで買った時

代ですよ。今はそんなことないですけどねえ。

中村 ええ聞いたことあります。

室伏氏 で、紙は仙花紙で、悪い紙でねえ。それでも皆、読書ねえ。特に、戦争中秘密主義だったでしょう。本当はこうだとかいうのがたくさん出たでしょう。そういうのがたくさん売れるわけね。それからもう戦争中の学問もがらっと変わっちゃって、新しい学問どんどん出てくるわけでしょう。で、そういうの本出たりしますから、それは皆、本読んだんでしょねえ。本に飢えた時代ですね。まあ時代の変革期の中における、大きな特徴って言ったら、やっぱり戦前までの、隠された事実が表に出て、ということがひとつ大きな流れね。それからもうひとつは、新しいね、学問とか知識が、今まで閉鎖的ですからね、入ってこないっていうのが、入ってくるっていうんで、読書熱っていうのが、日本全体に高まっていた。で、児童文学なんかは、『銀河』が出たりいろいろして、結構、児童文学も華やかなんですけどね。ほとんど翻訳が主になるんですけどね。

中村 うーん、それより前は先生は児童文学には興味が……。

室伏氏 ええ若干ありましたよ。戦争中、本も読んだんですけどね。ていうのは、本読む時代ですからねえ、本、皆読んだんですよ。わかってもわかんなくても（笑）。西田幾多郎の『善の研究』⁽³⁸⁾なんて難しくてわかんないんだもん。それを……。昔は読めば頭がいいなんてのもあったんですけどね（笑）。結構、読みましたよ。

中村 で、その児童に与える影響なんかも常に考えて。

室伏氏 そういうことは、何も考えないんだなあ。ただ子どもに本を与えて、精神的に、豊かな精神的なものをもってもらいたいと。戦後ですからねえ。子どもたち、心の中なんてのは、全然……で、新しい教育ですからねえ。難しかったんだろうなあ。まあ今でいう学校に来ない子とか、いじめとか、いろいろあるわけよね。タバコ吸ったり……。そういう子どもたちを、なんとかできねえのかっていうのが、基本なんですよ。結局、今日に至るまで、子どもは救えなかったね（笑）。駄目だったな。つらつら思うに。なかなかね。なかなか救えないもんですね。

中村 図書館の担当になられたんですか、その時。

室伏氏 ええ。

中村 英語の先生ですか、先生。国語？

室伏氏 国語。で、図書館に。ところが分類なんかね、わかんないわけだ。で、『[日本]読書新聞』なんか読んでてね、それにね、総記とかなんとか・・・って分けてるんですよ。で、日本十進分類法なんて知らないから、そういうのを見たりして、分類してたんだけど、そのうちに、校長さんがおまえ図書館やってるんだから、一所懸命やれ、ってこう言うわけね。そしてねえ、で、『学校図書館の手引』なんかを・・・見たのを見ないのか、記憶に無いんだよなあ。ともかくはじめるわけですよ。その当時ねえ、教員のねえ、試験みたいのやったよ。教員のねえ、実力テストみたいのやったんだよなあ。なぜ覚えてるかっていうと、その中で、試験の中に、図書館の日本十進分類法が出るんですよ。試験問題に。

中村 へえ。

室伏氏 で、私は知らないからできない。

中村 どこであったんですか？

室伏氏 学校。県全体で。

中村 どこかに呼び出されて。

室伏氏 いや呼び出されて・・・全員じゃなくてね、選ばれた人達が、試験を受けさせられたんだ。

中村 何だろう。

室伏氏 何だろう。で、その試験の結果っていうのは、出たはずなんですけども。教員の実力試験みたいのやったんですよ。それ以外にねえ、新教育の講習っていうのがあって、ほうぼうに講習受けに行ったり、で、試験なんだ。その時に、日本十進分類法だとか、開架式だとか出てねえ。私はわからなかった。図書館の仕事をはじめてるんですけど、まだはじめてばかりだから、何も知らない、わからなかった。

中村 何でしょう。それ、興味深いですねえ。

室伏氏 で、出た理由っていうのはねえ、図書館が重要って認識されて。この図書館をつくらうという機運が出てきたから、そういう教員の実力テストみたいなものの中に入れたんだろうと、私は思うんです。そういう時代に

なったから。じゃなきゃ入り込めない。でもまだその当時、学校図書館、そんなに認識が高まった時代じゃないんですけどねえ。まだスタートの段階ですからねえ。そういうの出した人がいるんだよなあ。静岡県教育委員会？が、出したんでしょうねえ。で、できなかった私が1番じゃなかったことは、事実ですね(笑)。

中村 できた人はいるのかしら？

室伏氏 うーん。そのうち校長さんもねえ、クリスチャンですけどね。なってるのかな？その前か。初代の校長さんがね、まあ時代もあってか、学校図書館をつくろうっていうことになったんですね。で、町長さんがじゃあ買えなんて言って、買ってもらったね。だから恵まれてるんですよ。で、そのうち校長さんが替わって、その人熱心でね、クリスチャンでね。でね、製本の講習会なんかやるんですよ。それで、古野健雄さんてね、もう図書館の古い人の間で、ああ古野さん、って有名なんですけどね。古野さんという人が。これねえ、どこでどういう風に頼んだか、県の図書館協会へ頼んだか、日本図書館協会へ頼んだか、図書館関係ですよ。古野さんが来てね、製本の講習やったりね。で、先生方に、製本の講習をやる。その時に、間宮不二夫さんという人も、一緒に来たんだと思うんですよ。で、どういう風に図書館をしたらいいかっていう風なアドバイスをして帰ったはずなんですよ。で、一躍、だから近郊の学校で有名になっちゃってね、わざわざそういう人が来てやるから。

中村 あ、先生の学校にだけ来るんですか。それは県じゃなくて。

室伏氏 そうだよ。校長先生が呼んだんですよ。それで、で、しょうがない、近所の学校の先生集めて、製本の受け売り講習やったり、したんですが。それはまあたいしたことじゃなかったんですけどね。で、そのうち……。まあその当時もう全国学校図書館協議会はできていたんじゃないかと思うんですが。できつつある時だったのかな。創立の時は、私は田舎にいたから、よく知らないですよ。知ってるのは、今村さん、知ってるんじゃないのかな。できた事情っていうのは、よくわかるんですけどね。それで……。

中村 じゃあ先生はその当時、中央とは関係は無かった。

室伏氏 いやあもう。ごく田舎の、田舎の先生ですからね。ただ今はねえ、

省みて、なるほどと思うことがあるんですよ。それはね、学習指導要領がはじめて出るんですよ、当時。で、試案っていうのが出てね、その国語のねえ、学習指導要領というのはねえ、今、私、持ってますけれどねえ、この中身ねえ、これ、後から見て、なるほどと思ったんですけどね。その当時は、ほら、右も左もわからないから、ただ学習指導要領見て、一所懸命にやったっていうだけだから。指導要領だつて見ないんだなあ、教科書だけ見ればいいんだから、ということだったんですけどねえ。見たらねえ、学習指導要領の国語の中に、もう図書館を使いなさい、図書館の利用をさせなさいっていうのがねえ、いっぱい出てくるんですよ。なるほど、それを……。で、教科書にも、図書館を使いなさいっていう単元もちゃんと出てくるし、図書館を使え使えという……。いっぱい出てくるんですね。だから授業の側面から見ても、図書館を使うという方向性が、私はひとつ……。そういうね、学習指導要領の側面から出てきたんじゃないかと。大きい。だつて実際に授業をやつて、だつて国語の時間に図書館を使つて、図書館のことを教えなさいって書いてあるんだから、単元があつて。だから皆、教えてたし。そういうことが、ひとつは底辺にあつたんじゃないですかね。我々田舎から見ればね。全国的な流れっていうのは、よく……。誰も知らないし。という風に、思うとね、そういうのが、底辺にあつたんじゃないのかなあつて思うんですけどね。

中村 はい。

室伏氏 で、私のところは、幸いに、図書館をつくるのに、市がお金を出してくれて、で、たぶんねえ、前の町の図書館の残り、どっかにあつたんでしようね、それも持ってきちゃってるんですね。中学校にね。で、本を買うことに関する苦勞はございませんでした。ところがねえ、その後、東京へ出てきてねえ、まああの『学校図書館』の創刊号にも出てきてるでしょう、全部、『学校図書館』創刊号から全部見たらいいですよ。それでねえ、中には、日曜日、山へ薪を取りに行つて、それを売つて本代にしたり、それから、廃品回収？それから鉄線とか銅線でねえ、今は見向きもされないけれども、これ高く売れるんですよ。それを持ち寄つて売つたりね。で、本箱も無いわけだ。だから先生方が板を買つてきて、本箱をつくつて、廊

下の隅において、山で薪拾ってきてそれで本買ったり、大変な苦勞したんですよ。私のところはそういう苦勞しなかったんですけどねえ。まず、東京近辺、田舎もそうですけどね、まずお金が無かったところは、そういう風にしてお金をつかって、やったんですよ。で、廊下に置いたり、ということが、起こってくるんですねえ。まあその当時の苦勞話は大変なものですよ。今はとても考えられないねえ。田舎って、本屋行っただって本無いから、心ある人は東京まで行って本買うとかね。まあ古本屋はたくさんあって、まあ結構本も出回ってたんですけどねえ。ともかくそういうことだったんですよ。

で、これが、学校図書館運動に、つながっていくわけね。建物も無い。人も居ない。本も無し。3無いつて言うんですよ。お金も無い。それをね、なんとかしてくれ、ということから、起こったのが、[全国]学校図書館協議会設立の、運動なんです。同時に、学校図書館法成立の運動に、それがきっかけになって、入っていくわけですよ。学校図書館協議会が中心になって、法律をつくるということに、署名運動したり、努力をすることになるんです。その、だから戦後からのそういう大きな、先生方のエネルギーが、学校図書館法に集結したって考えたら、一番いいんじゃないですかねえ。で、同時に、もうひとつはアメリカの影響があるんでしょうねえ。CIE ライブラリー⁽³⁹⁾があったり、それからアメリカの、まあ教育使節団もそうだけれども、図書館に関する、ねえ、援助っていうのが、出てくるっていうことですよ。だから教育使節団の報告書もねえ、顕然として、大きな意味をもったんでしょうねえ。我々田舎の方はそういうことで。ただ私のところは本があったから。

で、戦前からあった、中学校は無いからね、小学校は戦前からありましたけれども、使い物にならないんですけどねえ。でも名残があるんですよ。岩波[書店]に「少国民のために」っていう本があるんですよ、出てるんですけどね。音の話とか、光の話とか、今でも、復刻されて出てるんですよ。戦争中の話ですけどねえ。学校の教育で、戦争中ですから、科学教育っていうのを、重要視するんですよ。で、岩波なんかはね、「少国民のために」っていうシリーズを出すんですよ。音の話とかね。これ、今でも手に入るん

ですけどね。それは、思想的な問題じゃなくて、自然科学ですからね。光の本とかね、そういうのを持ってるところはね、そのまま使えたんですがね。まあ物語でもねえ、結構、戦前の物語とかも、結構出ますからねえ。だから小学校なんかはわりあいよかったですけどねえ。それでも新しい本はどんどん出る。翻訳されて出てくるわけでしょう？だから皆、買ったかったですねえ。だからそういう風にしてやったっていう……。身をもってやった人たちは、今、言ったように本買いに行ってるっていう苦労話っていうのが、あるんですけどね。それから、先生方は先生方で苦労をするし、で、まあ志のある人たちが、じゃあ学校図書館協議会つくって、法制定をしようっていう、そういう路線が引かれたっていうことでしょうね。で、学校図書館協議会ができて。

中村 そういう運動っていうのは、先生のところには届かなかったんですか。
室伏氏 いやあ田舎では全然。そんなものできてもできなくても関係ないでしょう（笑）。

中村 静岡で参加した人がいるとかって聞いたことはありませんか？

室伏氏 ああ居ますよ、遠藤英三とかいろいろいますよ。

中村 そういう人たちはどういうところからつながって……

室伏氏 それは皆、先生ですよ。

中村 何のきっかけがあって全国的な動きにつながったんでしょうか。

室伏氏 それは、呼びかけしたんじゃないのかな。今言ったように、全国学校図書館協議会は、各都道府県が中心になってますから。各都道府県につくるっていうことも……。その後できるんですけどね。うーん。まあそういう横の連絡が、私、行った時は横の連絡も何も無かったけどねえ。ひとつはねえ、もうひとつは、教員組合ですよ。日[本]教[職員]組[合]。教員組合の組合活動というのがねえ。そっちの方は身近な問題だから、関心っていうか、組合っていうのは俺のことだから関心ある。日本図書館協会とか、学校図書館協議会っていうのはねえ、知らなかったなあ。雑誌が出ますからねえ、『学校図書館』っていうのが。そういうのはまあ買うんですけどねえ。

中村 そうですか。どうやって買ったんですか。

室伏氏 どうやって買ったのかなあ。うーん。どうして買ったんだろう。本屋から買ったのかなあ。

中村 本屋さんに並んでたんですか？

室伏氏 いや並ぶっていうか、頼んだんじゃないのかなあ。覚えてない、それ。その記憶はないなあ。でも、あっても、私なんか読まないですもんね（笑）。色んなところから出てきますからねえ、学校図書館の教育なんかの雑誌。出てきたんですよ。

中村 『図書教育』とかそういうのも読まれました？

室伏氏 全然そんなの。学校の時は全然読まないよ、そんなの。関係なく、自分でやればいっていいことで。だからあんまり体系的でもないんだな（笑）。だから、ごく田舎の、ごくあたり前の、平平凡凡の先生の話ってことだなあ。何かを全国的に何かをやろうとか、皆で力を合わせてやろうとか、そういうものないし、ただ授業をやればいい、先生やって、っていうそのレベルなんです。で、全国学校図書館協議会ができることになるんですね。その辺の事情は、それはねえ、[秋田県の]大曲の佐藤宏之助さんなんかは詳しいですよ。後で住所と電話番号とかあれしませうけれどね。熱心な人でね。いまだに熱心でやってるんですよ。で、法律が、これ議員立法なんですよ。で、振興法なんですよ。法体系に従ってないんですよ。だから皆さんよく教育基本法があつて、学校教育法があつて、学校図書館法があつてって法体系があるとしてるでしょ。でも振興法なんですよ。議員立法なんですよ。これに関しては、大きい声じゃ言えないですけど、収賄事件がありましてね。たった学校図書館法をひとつつくるのに、収賄事件が。学校図書館協議会は、どうもねえ組合との関わりのような方向性っていうのは、初期の段階からあったんじゃないかと思うんですね。で、ずーっとですから、そういう革新的な・・・とてもそういう傾向が強かったですね。

中村 日教組・・・。

室伏氏 組織づくりということですね。で、これは東京が中心になってやるわけですからね。で、全国へ流れて行くんですよ。

中村 はい。で、先生の方の図書館のお話に、ちょっと戻りたいんですけど

ども。その、どういう風に使われていたかっていうことなんですけれども。貸出っていうことですか？社会科とかってどうでしょう？社会科とか国語科の授業で、とか。先生の使い方とか。当時どういう風に使われていたんですか。

室伏氏 それが問題だ。あのねえ。学習に結びつく、そんな世界は何も無いですよ。だって教科書と学習参考書を勉強してりゃあそれで済むわけですから、っていうことです。で、そのうちにだんだん受験勉強が激しくなるに従って、もうそれ中心の教育になっちゃうでしょう。というのはもう基本的な問題ですよ。

中村 それはもうじゃあはじめっからですか？その戦後できて、学校図書館ができてから、一度たりとも、そういう新教育の中での学校図書館っていうのが、現実に行なわれているのは、見たことないんですか？

室伏氏 教科書に、図書館使いなさいとか、図書館のことやりなさいとか、それはそこでやりますけどね。それ以外では、図書館を先生が使う？

中村 やるってどういう意味ですか？その図書館を使いなさいっていうのをやるっていうのは。

室伏氏 単元がちゃんと。国語なら国語の時間で。利用指導の時間っていうのはねえ。私がいたころ、利用指導なんていう世界、時間は無い。図書館の使い方を教えることもない。本を読む。だからつまり読書指導なんですよ。読書指導という形です。日本のスタートは読書指導ですよ。学習に結びつくという条件は、私は無いと思ったんですけどね。どの先生方も読書指導。

中村 どの先生も？

室伏氏 すべての先生が。まああの関心のない先生もいますけどね。だいたいまあ口を開けば読書指導っていうことなんでしょうねえ。これは国語教育から出てくるっていうことです。これはまあ国語教育のひとつの流れの中で、これはあの、井上敏夫さんという埼玉大学の国語の先生ですけどね、この人がある時、講演でねえ、日本の読書指導は、戦前まではね、たとえば綴方運動とかねえ、国分一太郎とかねえ、山形・・・東北の人たちの系列？があって、読書指導というものを、国語教育が中心になってきた、と

こういうわけですよ。ところが、戦後になって、ほら生活中心主義の、いわゆる言語中心主義の国語になったものだから、読み書き話すといういわゆる言語生活中心主義の国語教育ですからね。読書はどこかへいっちゃうんですよ。で、それが、学校図書館に、が、それを引き継いで、今日まで読書指導というものをですね、発展させてきたのは、学校図書館であると、これは、井上さん、はっきり言って、そう言って。これは私、事実だと思うんですよ。だから日本の学校図書館っていうのは、読書指導以外無い。だから皆、熱心な先生たちは、皆、読書指導ですよ。だから今村さんだって、数学の先生だけど、読書指導でしょう。大曲の佐藤宏之助さんもそうだし、遠藤英三さんも・・・やっぱり読書指導でしょうねえ。やっぱり皆、読書指導ですよ。だから、これは日本の特徴なんでしょうねえ。だから学習に役立つなんて言うことは、口にはしても、実際には存在しないんです。っていうのが、日本の学校図書館の流れだと思うんです。これは視聴覚教育によく似てます。視聴覚も図書館も、アメリカの占領政策の中からスタートするんです。で、図書館はCIEのライブラリー、視聴覚はCIEがやった、ナトコという16ミリの映写機の貸与によってはじまってくるんですよ。で、結局我々の方は、読書指導という枠の中で、だいたい国語中心ですね。国語中心で、読書指導が展開されてきた。視聴覚は、映画教室とか、教室の外で、映画教室とかなにかっていうことで、ずっと発達をしてくるんですよ。教室の中に入れてないんですよ。

中村 う一。

室伏氏 学校図書館も視聴覚も、残念ながら、入ってない、入れなかったんですよ。だから読書指導になるんです。だって、教科書を中心に教えてればいいし、だんだん受験勉強が厳しくなってくるから、もうとても本読む・・・だんだん本読まなくなってくるんだけれども、そういう学校の体質があるでしょう。だから、教室の外で、読書指導。あるいは国語の時間の延長のような形でね。視聴覚も、映画教室とかなんかでやってくる。という風なスタートをするんですよ。で、学校図書館は、私はもう戦前から含めて、読書指導で、ずーっと一貫してやってきたという風に見ていいのではないかと。で、特に戦後の場合には、読書指導とは何かということ

を、問われてねえ。まあいろいろの人がいろいろと、やってくるんですけどもね。まあだいたい読書指導の歴史でしょうね。

中村 先生が当時なさってた読書指導というのは、どういうものですか。

室伏氏 田舎で？

中村 はい。

室伏氏 ろくなことやってねえなあ。今考えてみるとなあ。何やったんだろう。図書館行って読ませる？何もしないねえ。

中村 図書館にとりあえず連れて行くんですか？

室伏氏 連れて・・・連れても行かなかったよ。行った経験てないなあ。でも皆、本読んだよ。うん。で、読書の感想？書かせた？まあその時コンクールみたいのありませんからねえ。で、学校の新聞？どうしてたかな・・・。まあろくなことやってないですよ（笑）。ろくなことやってないですよ。だから図書館があって、皆が結構あれして、そしてあれ、感想文かなんか書かせたのかなあ。そういう経験、記憶はあるんですけどね。あと何やったかなあ。読書感想文っていうのはねえ、私は意識してなかったんだけどねえ、まあ全国学校図書館協議会がやってる読書コンクール〔筆者注：同協議会と毎日新聞社による「青少年読書感想文全国コンクール」のこと〕あるでしょう？あれも極めて批判的でしょう。なに一、コンクールって、読んだら感想書けっていうの？なあ。ああいうのは・・・何て言ったら。何言ってんだ、おまえが火つけたんじゃないかって、言われちゃって（笑）。そうですかなんて。それから感想画とかねえ、やれって言ったんですよ。それがコンクールになっちゃった〔筆者注：「読書感想画中央コンクール」のこと〕。このコンクールがいろいろ問題がございましてね。結局ねえ、小学校なんか選定されると、億の単位の売上になるんですよ、一冊ですよ。とねえ、本の選び方にねえ、いろいろ問題が出てきてねえ。しかも、さっき言った革新的な選び方をしたから。けしからんって。

中村 それ、全国 SLA 内部の話ですか？

室伏氏 いや違うよ、SLA は自分でやってるんだから、外から。児童文学者がいろいろ文句言ったり。今、本の選び方が変わりましたけどねえ。文部省は、極めて苦い顔してね、非協力的になったんですよ。そういう一幕

もあった。難しいねえ、いろいろ話があっちこっち行っちゃって。でも、まあ日本の学校図書館の歴史っていうのは、読書指導の歴史でしょうねえ。

中村 で、先生はもうその当時、そのNDCとか勉強しはじめてたんですか？
室伏氏 何にも。分類とか、誰が・・・そうだよなあ、間宮さんとかなんか来て、これでやりなさいって、それでやったんだろうなあ。NDCなんか見たことないなあ。私がやったのかなあ。若いのがやったのかなあ。図書委員なんかにやらしたのかなあ。図書委員もあったからね。記憶に無いなあ。
中村 そうなんですよね、先生の1950年代のご研究って、図書委員についてのものって多いですよ。

室伏氏 図書委員ね。

中村 はい、そのご関心っていうのは、どこから。

室伏氏 図書委員？図書委員っていうのはねえ。そうだよその学校の時、図書委員やったから、つくったから。で、図書委員のことをやろうって。で、たまたま慶應へ入ってから、どうしてかなあ。図書委員のことやったんだよなあ。いや調べたよ。アメリカのいろいろなものを調べて・・・そうだよ、結構調べたんですよ。

中村 あれ？すいません、ちょっと前後しちゃうかもしれないけれど、その、慶應に入られたのはどういうことなんですか。

室伏氏 だから、その再生ですよ。これじゃしょうがない。勉強しないと。戦争中だから勉強もしてないから、読書をな、これは何とか勉強したいということで。じゃあ入るか、と。

中村 読書を勉強したいって、読書指導のことですか。

室伏氏 うん、読書指導とかね、やりたいと。だから、で、入った・・・どうして入ったんですかねえ。とにかく入ったんです。

中村 どちらで、どこで、お知りになったんですか？

室伏氏 どこで知ったのか。新聞の広告なんか見たのかなあ。何で知ったんだろう。何で・・・。

中村 何で図書館学なんですか、読書指導とか・・・

室伏氏 うん、だから、図書館やってきたし、図書館ってどうしても実体的でしょ？だから、それをやろうということなんですよ。再生の、そのちっ

ちゃい気もちが、そういう方に行ったんでしょうねえ、幼い気もちがね。で、入ったんですよ。入ってねえ、図書委員のことを調べた。アメリカのねえ。随分調べましたよ。で、今でもあるのかなあ。なんかちょっとした、図書委員についての書いてねえ、先生かなんかに渡したんじゃないかな、見てくださいなんて言って。それっきりだったけどね（笑）。

中村 それは授業とは関係なく、自分で。

室伏氏 自分で。

中村 へえ。先生ってどなたですか。その先生にとっての先生って。その当時。

室伏氏 その当時は、えーっと、ジョージヤ・シーロフ（Georgia Sealoff）という人でね、シアトルのねえ、高等学校の先生です。もう亡くなりましたけどね。高等学校のスクール・ライブラリアン。

中村 随分影響を受けられたんですか？

室伏氏 影響ねえ。うーん。具体的に？

中村 とか、印象に残ってることとかありますか。

室伏氏 まあ全体的に言えば、我々の違う世界の人たちが来て、極端に違う世界ですよ。図書館の文化をもった、アメリカの人たちが来るわけでしょう。そうねえ。人生観、世界観、全部変わったんでしょうねえ。

中村 慶應ですか？

室伏氏 全部変わったと思う。できのいい学生ではなかったから、ただ勉強したっていうだけだけどねえ。でも、アメリカのライブラリー・スクールで受けた印象だとわかると・・・ああこの程度ってなんでしょう？だいたい、来た先生の中にも、日本っていうのは遅れてるんだから、途上国として教えたような感も無きにしも非ずっていう感じですけどねえ。

中村 慶應の先生がですか？それは後にして思えばっていうことですよ。

室伏氏 うん。今、思えばねえ。でもまあ、人生観、世界観、全部変わっちゃったんでしょうねえ。ホントに再生です。いや考え方から何から、物の見方から、全部変わったんでしょうねえ。と思いますよ。

中村 じゃ、それは終戦から、慶應に入る間で、ご自分で、地方で考えられてた以上に、変わったっていうことですか？

室伏氏 もう私自身の人間から言えば、あそこで全部変わっちゃったんでしょ
うね。過去は全部あれで変わっちゃった。

中村 え、具体的に何か。ここは変わったっていうのは・・・もうちょっと
説明していただきたいんですけれど。

室伏氏 異文化ショックでしょうねえ。基本的には、異文化ショックだと私
は思いますよ。だから、今まで考え方、違う考え方もあると思ってきたし。
異文化ショックでしたねえ。が、根底はあれよ、アメリカ一辺倒でもない
んだなあ。それは、あれですねえ、ショックですねえ。だから、ライブラ
リアンとして教育されたからねえ。だからどこでも言うんです。私はライ
ブラリアンとして教育されたから、私はライブラリアンとして物を考える
のを癖にしていますよ、なんて言うんですけどねえ。

中村 当時慶應で教育を受けた人は皆そうですか。

室伏氏 様々です。もう。

中村 どういったメンバーですか。

室伏氏 一番、慶應のライブラリアンシップを身を挺して、今日まできてる
のは、鬼頭當子さんですよ。もう本当に、そのものとして、人生を送って
きたんだけど。鬼頭さんはどう思ってるか知らないけれども。私らは
そう思ってる。何人かにちよっとね、言ったら、そうだって言う人もいて。
そういう人もいる。全然反発して、脱落していった人の方が、多いですよ。

中村 へえ。反発ってどういう意味ですか。

室伏氏 反発って・・・。学問じゃねえんじゃないかとかさ。就職状況も悪
かったからね。就職したいけど、就職できなくて、っていう年の方が多い
んですからね。

中村 そうなんですか？

室伏氏 就職口ないんだもん。

中村 慶應を出ても？じゃあむしろ〔図書館職員〕養成所を出た方が？

室伏氏 ああその当時は養成所が主流。慶應の、慶應〔義塾〕大学の図書館
でも、図書館学校を卒業したのは、誰も採用しない、あああんなの駄目だ
なんつって、採用しない。で、高等教育機関なんかでも養成所を出た人が
主流で、というようなことなんです。だから皆、苦勞してるんですよ。東

京都立中央図書館に行った、間中祐一さんなんていうのは、あの子はできた子だけれども。図書館へ行くんだって言って、行った。それから石井紀子さんも、図書館行くんだって行って、そして日外アソシエーツ行って。もう我々よりも後の方ですけれどもね。その頃から徐々に良くなって……。1期生で図書館へ行った人……。1期生っていうのはねえ、皆、職もってきて、1年で終わったんですよ。職あったんですね。その為に職が得られた人って……。厳しかったんだろうなあ。2期生ってほとんど……。全滅で。私は3期ですけど、3期で図書館へ行ったの？あんまりいないんだなあ。で、5期、6期、7期くらいから徐々に、就職ができるようになってくるわけですね。そして、養成所の世界から、もう慶應の卒業の世界へ？皆、活躍しはじめて、今日にきたっていうことでしょうねえ。

中村 先生はもう辞められてたんですよ、学校、教員は。

室伏氏 勿論。で、就職無いんだよ。で、同級生皆、就職無い……。しょうがないから大学院行ったりしてね、それでもなかなか無い時代でねえ。厳しかったですよね。

中村 そして……

室伏氏 だから私はずっと学校図書館を、やることになるんですよ。

中村 慶應で教えられることになるんですよ。

室伏氏 そう。だって就職ねえんだよ、で、ウロウロしてて。で、手紙が来て、何だろうって。別の人を入れたかったんだよ。でもその人が帰ってこなくてね。で、おまえその代わりに入って、で入ったんだよ。

中村 すごい。

室伏氏 入ったらねえ、右も左もわからないでしょう。ちゃんと勉強したわけでもないし。結構ずるけてたから(笑)。それで、しょうがない、一所懸命勉強するんだ。勉強の方は入ってからでしょうねえ。そのうちに[日本]読書学会っていうのをね、阪本一郎さんとか、深川恒喜さんとかね、はじめ研究会って言ってたんだね。学校図書館の分野からおまえも出るなんて言ってね。日本読書学会をつくるんですよ。で、これは、心理学の人だとか、国語学会の人だとかで、つくるんですけどね、だって、読書のことって言ったってさ、右も左もわからないわけだ。しょうがない、勉強し

た。読書学会で、読書のことを勉強したんだなあ。右も左もわからないからさ。他、大先生がいたのに、わかんない……。で、我々は何を習ったか？せいぜいストーリー・テリングくらいだろ？そんな、読書なんてそんな、知らないんだよな。しょうがねえ、一所懸命勉強してさ。読書心理学だとか、アメリカの読書とか。で、なんとか、追いつけ追い越せっていうとこだなあ。そんなことでしたね。

松本武氏へのインタビュー記録

インタビュー実施日：2002（平成14）年1月7日（月曜日）

松本氏略歴：1924（大正13）年生まれ；中央大学専門部法学科を修了し、1947（昭和22）年3月、東京都芳林国民学校の教諭となる⁽⁴⁰⁾。その後、日野市の社会教育主事、千代田区立富士見小学校校長などを務めた⁽⁴¹⁾。

松本氏 これ（『学校図書館の手引』）。引越でね、もう表紙が無くなっちゃって。それがあの最初に出た23年に出た、最初に手にしたやつ。昔は紙が良くて、あの紙が無い時代だから変化してる。

中村 ちょっと最初に、先生がこの占領期にどういうお立場にあってどういうふうにこれを入手されたっていう、そういうなんて言うんだらう、ご経歴も含めたお話をうかがってもいいですか。

松本氏 それはね、あれ（『東京都小学校図書館の50年』⁽⁴²⁾）には書いてないんだ。

中村 そうなんです。そのとき先生は教員だったんですか。

松本氏 教員、教員。千代田区の芳林、芸者街。今ね、淡路小学校と一緒にあって昌平〔小学校〕ってなってるの、昌平坂の昌平、学問所の。日二つ書くまずね、で平。6階建ての今、中央校舎ができてる。昔はそこは金沢町っていったの。今のまつ〔筆者注：大河ドラマ「利家とまつ」〕とかね、いろいろやってるでしょ、百万石。東大のところは、上屋敷。下屋敷がその僕の最初に勤めた小学校です。金沢町って言うの、22番地。それで、校章がね、まったく前田家と同じよ。梅鉢紋どころ。で、前田家はほら祖

先は菅原道真と称してるでしょう。それで梅の。だから梅林だったらいいですよ、昔、江戸時代は。そこにできて、私立の芳林堂になってから公立になったから、公立では千代田ではあの頃はビリから2番目ね。

中村 新しいということですか。

松本氏 明治45年くらいに〔筆者注：43年に東京市芳林尋常小学校として開校〕。それはもう安政年間にできたんですね。そこに教員として行って。

中村 それがいつのお話ですか。

松本氏 昭和22年だね。

中村 そうなんですか。それまで師範学校にいらっしやった？

松本氏 師範学校っていうか、働きながら勉強してね。

中村 夜学にいらっしやったんですか。

松本氏 目的は僕は、法律やってね、いまの司法試験みたいな、昔、行政科っていうのがあってね。受かると高等官になれるの。それで勉強に行ったの。

中村 東京に行って、法学部に行って。中央大学の。

松本氏 中央大学は先生が半分くらい東〔京〕大〔学〕の先生なの、夜は。夜のほうがいいのよ、先生は。東大と掛けもちしてるから。それで合格率も高かったんですよ、法律所のね。それで歩いて行けるんですね。

中村 お昼は、先生、何してらしたんですか。

松本氏 お昼は学校やってた。夜、勉強。もともとは行政マンなのね。法律を軸に・・・

中村 戦時中はどこにいらしたんですか。

松本氏 戦時中は昭和18年はいろいろアルバイトやりましたからね。

中村 東京に出てらして？

松本氏 うん、18年に。それまでは田舎にいました。で、もともとは法律専攻だから。図書館は、無いですからね。しいて言えば図書館職員養成所ですか、上野に。図書館やるつもりなかったから。東京に行って、結局、法律だから社会科を得意にしていたわけ。で、社会科っていうのは戦後できたアレでしょ。で、昭和22年頃かね。僕は中学年の模範授業みたいなのがあったのよ。モデル授業。

中村 え、だってそのときまだお若いじゃないですか。

松本氏 若いけど、社会科好きだったから。あの頃は、今の体験学習に似て
ますよ。神田市場の授業やったのよ。あそこに市場があったから、今、空
き地になってるけど。それで、区内の先生見に来て。要するに社会科に夢
中になりだしたの。で、社会科っていうのは、頭だけじゃなくて体で勉強
しなくていけないでしょう。実際に見たり、試したり、やってみたり。で、
神田市場を見に行つて、続いてはどういうことをやるって行って市場になっ
たわけ。そのとき実際に見ることもいいけれどそうでない歴史的なものは、
口だけで教えるっていうのは僕らの子どもの頃、歴史の分野ではなくて、やっ
ぱり自分で調べていかななくてはいけない。本読むにしても。調べるにはど
うしても本が必要。そこで、本で調べるのが必要だなと思ったわけ。芳林っ
ていうのは昔、学校の一角にね、外神田図書館っていうのがあったの。当
時の戦争中ね、がらがらでね。そこに図書室みたいのつくつたのが、22年
でね。

中村 それは公立図書館ですか。

松本氏 学校の中のね。それ書いたのあるからコピーで送りますよ。長つた
らしいから⁽⁴³⁾。それで、本格的な図書館つくらなくちゃいけない。簡単
に言うとな。ところがね、あのあたりは空襲で焼けちゃった。神田明神に
残ってるだろうけど[筆者注：史料が残っているということか。不明]。こっ
ちも書いたのがあるから。

中村 ぜひ見せてください。

松本氏 淡路小のあのあたりは焼けなかったの。

中村 社会科に夢中になったきっかけっていうのはあるんですか。

松本氏 戦後できたからだよ。昔は公民とか、歴史とか地理でしょ。そうい
うので、まあ若い教師は関心があったわけね。

中村 皆ものすごく盛り上がり関心があったわけですね。

松本氏 そうそう。今の体験学習に似てるよね。ところが公費が少ないのよ、
税金。戦後だから。焼けてないところは全部親が金出し合つて図書室をつ
くつたりしたわけよ。千代田でも。焼け残つてるところはね。ところが、
その芳林のあの一角は丸焼けなのよ。校庭で死んでるぐらい。学校に金出
すのはできないわけよ。だから、私行つた頃はまだね、あの辺、神田明神

から上野の松〔坂〕屋のビルが見えるのよ。全部焼け野原で。で、皆、地下壕に住んで。隅田川も見られる。それも書いたのあるから。それでね、25年ぐらいからね、だんだん電気。山際電気、石丸電気っていうのがみんな父兄だったよ。まだちっちゃくてね、二階屋の時代なの。もともとあの辺は青物市場の間屋の父兄が多かったんだけど。そのうち、山際、広瀬、石丸なんてのがね、出てきてだんだん電気屋が増えてきたの。まあ、はしりだね、今の。で、学校にもお金出せるようになってきて。それにあそこはお祭りにお金使うところでしょ、神田祭で何百万も使ってたんだ、ひとつの町会。だからね、校長の言い方がね、ピースってひと箱いくらかな。

中村 タバコのことですか。

松本氏 百何円ぐらいかね。そのお金を出してくれればとね。それとね、自分でね、箱根の仙石原に林間学校もってたんですね。ところが戦後で食料無い。僕なんて買出しに行ったんですよ。もてあましちゃったの。で、それを売って、それを原資にして。町の人が買って。その頃は昭和28年ですね。これを書いたのもあります。

中村 その社会科に夢中になってご自身が実践されてるのは別に、中央で動きが出てきますよね。たとえば松尾〔弥太郎〕先生が出てきたり、深川〔恒喜〕先生がっていう。そういう動きにかかわるといふか、その方たちとお知り合いになるきっかけというのは何だったんですか。

松本氏 その図書館つくるときに、図書館業者の〔伊藤伊の〕伊藤伊太郎さんがつくることになったの。彼らの兄弟が若い頃ね。それも書いてある。文部省の深川さんがいろいろ助言してくれたの。

中村 じゃあ、まず伊藤伊に連絡したんですか。

松本氏 いや、伊藤伊はつくることになってから。それで文部省の深川さんがアメリカからちょうど帰ってきて、いいものつくりましようって。昭和28年頃。占領が終わった頃ですね。もちろん寄付は27年頃だよ。それから東大の裏田〔武夫〕さんね。コロンビア大学から戻ってきて。あの頃はまだ講師だったかね、月給は安かったんだけど。日本、トップクラスね。それで、日本一の学校図書館って毎日新聞にでかく出たのよ、昭和29年か8年かな、都内中央版に出てね⁽⁴⁴⁾。とたんに有名になってね。そのとき松

尾さんがそういう人を専門にしはじめたのよ [筆者注：学校図書館関係者を専任にする運動をはじめていたということか。不明]。

中村 先生はその時点では校務分掌で図書館の担当になったんですか。

松本氏 担当やって。

中村 それはどういうきっかけで？ご自身でやりたいって校長先生に言って？

松本氏 ほかに専任いないからお前やれってわけで。それで図書館つくって2年間専任だった。

中村 それは [昭和] 27から28 [年] ですか。

松本氏 29かなあ。で、図書館研究して、中身の整備はやる、研究はやる、っていうのはとても学級担任じゃ駄目だってんで。

中村 じゃあ、校長先生がすごい理解があったってことですか？

松本氏 そうそう。玉川学園の小原國芳と親友だから。それ書いてあるでしょ。いや、書いてない。忘れてた。それはもう尊敬している校長さんでしたからね。それはもうかなわないって人だったけど。

中村 お名前はなんておっしゃるんですか？

松本氏 立石良作っていうね。で、どうも若い時代にね、奈良女 [子] 高 [等] 師 [範学校] のね、附属の先生になってるの。その頃、新教育の、大正10年の。それでやって、小学校の先生にまたなって。世田谷の砧小学校に勤めてたの。小原さんはほら、玉川学園行く前は成城学園の教頭やってたから、仲良しだったの。だから「お前」っていう間柄なの。それでね、まあ成城学園に行ったから、まあハイカラな先生だったんだらうね。進歩的な。だから僕はそういうの理解があったわけ。それで神田に来て、実は担当やるのいやだったんだけど、とてもできないって。で、その立石先生が日本だっていい学校あるよって。それで紹介状もらって玉川学園行って。そこで小原國芳さんとはじめて会った。それで小原國芳さんに夕飯ご馳走になったね。久米井東さんとかね、初代の [全国学校図書館協議会 (全国SLA) の] 会長のね。その教え子なんだよね。香川師範 [学校] の。小原國芳さんが、あの人は京都 [帝国] 大学出、鹿児島師範 [学校] の出だけど。京都大学出てはじめて師範学校の先生やったのね。そのときの教え子が久米井さんでね。はじめてそのとき聞いたの。久米井くんは教え子で

ね、そのとき香川師範で3番目だったって。優秀な3人の1人だったの。若くして視学やってね、先生やって、講師やってる人。それが、全国SLAの初代会長なのよ。

中村 なるほど、つながってますね。すごく。

松本氏 ものすごくつながるのよ。それで、最初はね、久米井さんは氷川[小学校]の校長だったんだけど。で、第1回の、占領中ですよ、何人かの先生がアメリカの学校図書館情報調べてこいって、国から派遣されるのよ⁽⁴⁵⁾。ここに書いてあったかなあ。

中村 5人の先生ですよ。

松本氏 それで出て、それまでは事務局は氷川小学校。会長が久米井さんで。そのときに専任でやってた増村[王子]さん、女性。生きていたら多少記憶にあるでしょうけれど、生きてるかどうかね。その増村さんが学級担任しないんですよ。専任でやってたの、氷川で。で、久米井さんがアメリカ行ってる時に、松尾さんが無断で東京駅前の京橋[昭和]小に移っちゃったの。その辺から利害関係が生じるのよ。『学校図書館』で機関誌あるでしょ、昭和25年[創刊]。あの版權をめぐってもね……。もうその頃から……。彼らふたりは、こっちは青山師範、向こうはさっきの香川師範でしょう。年齢はえらい違う。

中村 久米井先生は香川師範の卒業生で小原先生の教え子で、勝手に移っちゃったのは青山師範出の松尾先生ですか……

松本氏 これは僕の推測ですけどね、なんでかたや青山師範と、香川師範で、松尾さんと年齢も20才以上違うのにね、図書館で一緒になったのかなって疑問に思ったことあるんです。僕が23、4[才]のときにね。2人はローマ字教科書の著者、そこに共通点があるのよ⁽⁴⁶⁾。一時期、戦後ね、ローマ字が必須科目だった時代があるのよ⁽⁴⁷⁾。その教科書2人でね、やるのよ。そこで、意気投合したんじゃないかなあ。推測ですけどね。それで図書館に2人とも関心もって。久米井さんは初代会長で、それで松尾さん、学級担任してたから。そうしょっちゅう学校空けられないので、辞めちゃったわけよ。辞めてそれやこれやでいろいろと金になるものに目をつけると、松尾さんは。とりあえずそのときには雑誌『学校図書館』しか

ないわけだ。もうひとつできたやつはつぶれてね。

中村 『図書教育』のことですか？東大の先生たちが書いていた、中心になって、3号雑誌みたいにしておわってしまった？⁽⁴⁸⁾

松本氏 それ出版社が千代田区ですか。千代田区ならそうですね。3号雑誌だったね。その『学校図書館』っていう雑誌は、[創刊は]昭和25年ですよ。そのときは編集責任者が松尾弥太郎、発行責任者が久米井会長。それで、潮木孝吉さん。この人、生きてますけどね、この人がね、青山師範の後輩なんです。松尾さんが全国飛び回ってる間、留守を面倒みたりしたらしいね。ものすごくカバーして、それで松尾さんは校長にいらまれないで学校あけて全国飛び回ってたらしいのね、でも、もうだめで退職した。それで退職した時に東京駅前に、今は城東小学校ってなってるかな、京橋昭和[小学校]って言ったんですよ、昔。そこに事務局を持って行ったの、氷川から。で、もちろん氷川のときも僕は行ってましたけど、京橋[昭和]小に来てからは私、秋葉原だったから帰りは山手[線]で帰ってたから。長屋に住んでたから、下宿で。帰りに必ず東京駅で降りて寄ってたわけよ。松尾さんが退職して、最初一人。それから佐野[友彦]さんが入って。佐野さんは教え子なんだよ。小学校の。

中村 そうなんですか。どこの小学校ですか。この世田谷の？

松本氏 そう。三軒茶屋あたりの。松尾さんは三軒茶屋に住んでたからね。

中村 なるほど。じゃあ佐野先生は当時まだ師範学校を出たぐらいの？

松本氏 出てね、いったんは梅丘中学[校]の先生。昭和22年ですかね。22年卒の[東京]第一師範[学校]にはね、[東京]都教[職員]組[合]の委員長とかいっぱい出てるの。22年頃の師範学校はみんな左翼傾向あるのよ。全国的に。

中村 じゃあ、佐野先生は日教組の？

松本氏 いやいや。ではないけど、同級生、同じクラスの中にいっぱいいるの。共産党のね・・・人も同級生。同じクラスだから。それはあとでわかったけどね。あと、鈴木桃子さんっていう女性がいまして、それも[松尾先生の]教え子なの。

中村 先生なんですか？

松本氏 ぜんぜん。主婦かな？

中村 それはこの方（手元にあった資料を指して）？

松本氏 出てない。

中村 わかってきました。

松本氏 それで、だんだん仕事やって給料もらうために金かせがなきゃって、そういうことでまず目をつけたのは機関誌。下から無でやってるから、ゼロで。金かかるんです。僕は全日〔本〕小〔学校図書館研究会〕つくるときにだいたいポケットマネー100万ぐらい出したからね。食事代とかいろいろとね。

中村 ずっと私が疑問に思っていたことのひとつなんですけれど……。私は紙で読んだだけで、あと何人かの方に少しお聞きしたぐらいなんですけど、松尾先生って強烈なリーダーシップのようなものがある人なんですよ？

松本氏 手腕家ですね。学者っていうよりはね。

中村 そういう方が現れてくるいきさつを知りたいんです。誰かにひき上げてもらったとか。

松本氏 事業家だよ。ひとつの事業のように考えてたんじゃないの、悪く言えば。儲けよう。それはあると思うね。だから必読図書⁽⁴⁹⁾とか金儲けのものにどんどん手をつけて。

中村 一番はじめは、私がアメリカの資料なんて読んでると、深川先生とか阪本〔一郎〕先生とか、そういう文部省と学者の人が出てきますよね。そこからいきなり現場の中から吸い上げられて？くるのが松尾先生なんですよ。その理由っていうか。深川先生やCIE側が目をつけたっていうよりも、松尾先生が現場でどんどんやって……

松本氏 それは自身でどんどん出てきたんですよ。それはひとつ簡単ですよ。それとね、阪本さんは青山師範、第一師範の先生だったの。でね、わかりやすいというと松尾さんは青山師範。図書館の研究指定校を、昭和24から2年、第一師範の附属小学校がやってるのよ⁽⁵⁰⁾。

中村 モデル校ですか。

松本氏 そう。全国でひとつ。そういう関係でね、現場にはっきりと立ち位

置があるのは松尾さんですね。しかも阪本さんの教え子でしょ。

中村 教え子なんですか。

松本氏 ああ、教わってるでしょうね。阪本先生は心理学だから。教わっていると
思うよ、年齢的にね。附属の校長もやってるしね。

中村 阪本先生ですか。

松本氏 戦前にね、阪本さん自身が目をつけてたんですよ、現場ではこれは
松尾がつかえるぞってね。しかも、師範学校は青山師範系統。で、松尾さん
ていうのは学閥にこだわる人でね、だからキーポイントは青山師範だよ。
全国 SLA の最初は。潮木さんも青山。佐野さんも青山。僕は第二師範系
統だったから。

中村 第二師範系統っていうのはどういうことですか。中央 [大学] のご卒
業生では？

松本氏 うん、だけど師範学校もやってるの。第二師範。

中村 それはいつ？

松本氏 戦争中。だいたい学校図書館で脚光浴びてる人はほとんど第一師範
だったね。おもしろいね。

中村 松尾先生は学閥系列でお知り合いをたどって、どんどん引き入れていっ
て・・・

松本氏 うん。だからキーポイントは全部自分の後輩ね。第一師範の。とり
あえず切りましょう、これはまず。松尾さんね、事務系統で手腕あるから。
お金儲けしなきゃゼロだから。で、京橋 [昭和] 小は追い立てくったわけ。
電気は使う。電話は使う。たまたま校長が自分の先輩だった。でも、それ
がまた使えなくなって追い立てくったわけ。それで、独立の事務所をもち
たいと思ったわけですよ。第一候補は千代田区あたりにつくりたいという
んでしょ。で、僕は神田にいたから神田にいいのがたくさんあるって。そ
いで松尾さんに今の場所、大曲のあそこにね。そのために自分の家を抵当
に入れてる。あそこに2階建ての木造事務所をつくったのは、全国 SLA
の会誌に載ってる⁽⁵¹⁾。

中村 今の春日のところですか？

松本氏 大曲っていうんです。

中村 今は春日？

松本氏 坂の途中にある？

中村 ありますあります。じゃあ、ご自分のポケットマネー、財産で？

松本氏 だって言われているよ。採算は取れるとふんだんじゃないの、あの人のことだから。だけど、三軒茶屋の自宅を僕は2、3回家内を連れて遊びに行ったことあるんだけど、邸宅よ。

中村 それは松尾先生のご家族のための。

松本氏 それはもう絶大な力をもってるわけよ、ほとんど松尾天下だよ、初期は。いろんな人はいるよ。若林元典さんとか。ひとりじゃできないわけだから。高校も傘下にいれなくちゃいけない。中学校も傘下にいれなくちゃいけない。小学校は自分のところだから。高校は若林〔元典〕さんとか。この人も東大出身でのちの駒沢大学教授の、これもなかなかの人だけどね。白鷗高校の先生。

中村 白鷗は芦谷〔清〕先生がいてってところですよ、アルバイトされてて。

松本氏 芦谷さんもまた違う人のつながりがあるんだ。それで、若林先生は東大で、高校に行くの。で、中学校は意外に東京は人材いないのよ。いないけどね、この最初にね、鳥生芳夫さんがいるね。東京都板橋区の上板橋第一中学校。この先生が中学校いたかな。で、この鳥生さんの下に芦谷さんがいるの。新卒で勤めてたの。それで彼は将来、教師辞めて全国 SLA に飛び込むよね。それから、実践〔女子〕大〔学〕の今村先生と従兄弟なんです。それで芦谷さんは大泉の第三師範学校出てから上野の図書館職員養成所修了し、図書館に興味もったから・・・就職難で難しい時代で。で、今村くんは第二師範でね、僕の後輩になるんだけどね。彼は慶應〔義塾大学〕の図書館情報学のできた頃の頃に入ってるんですよ。学会の会長やった、名誉会長やった、亜細亜大学の室伏〔武〕さん。室伏さんも慶應出た。ああ、深川さんのこと知りたいたったね。僕は初期はね、現場でやりだして、中心にいたから目立つわけですよ。僕の存在ってものが。

中村 芳林でってことですか。

松本氏 それで研究指定校やってるうちにね⁽⁵²⁾、阪本さんと仲良しになっちゃっ

て、2人とも大酒のみだったから。あの人の本を全部集めてね、作品表見たらあの人書きまくった時代があるんです。売れっ子でね。それをずっとやるの。僕もある程度、書いてたんだけどね。

中村 阪本先生の思い出って他にありますか？それ以前の阪本先生とか。

CIE で一緒に仕事したり、ワークショップとかで・・・

松本氏 あの頃はまだ僕らはペーパーだったしさ。全然。だから厳密には僕らは2番手なんですよ。本当の1番手は、むこうのCIEのさ、昔の講習を受けた・・・

中村 それって、この『手引』が発行された時の講習〔筆者注：正式名称は「学校図書館講習協議会」〕とかは行かれてるんですか。鴨川とかで。

松本氏 行ってない。僕は22歳だから、そんなのには・・・

中村 それじゃあとから手に入れられたんですか、この『手引』は。だってこの出版って講習会の前じゃないですか。

松本氏 これは学校にあったんです。芳林小学校の引越の学校の資料整理でね、もらってきたんです。

中村 これをはじめて見たときの思い出とか印象とかありますか？

松本氏 これしか無い。あの頃は、全部日本人の本読みました。戦争中で英語駄目だから、僕らはね。日本語で書いたのは20数冊だったですね、全部読んでも。学校図書館に関係のあるのはそれで全部なの。その後僕が関わった本だって200冊あるかないかで。論文も含めて。そんな程度なんです、最初は。

中村 24冊くらい？

松本氏 20数冊。

中村 それじゃ、芳林図書館つくる時にこれ（『学校図書館の手引』）を読んで参考にされた、と。

松本氏 読みました。分類だとか、そういうことをね、これから仕入れました。

中村 皆そうだったんですか、当時日本で学校図書館つくる時は。

松本氏 戦争直後はそんなもんです。

中村 この本（『学校図書館の手引』）ってものすごく大きな存在だったって

言えますか。

松本氏 大きな存在だねえ。これまだ1冊しかありませんからね。ええとね、これが表紙。『学校図書館の手引』。今の学芸図書の前身は師範学校教科書 [K. K.]。ここに載ってる。そこで出たのがこれ。そのかわり、その後、雨後の竹の子のように本が出ました。分類だったら芦谷さんが研究してたしねえ。鈴木英二さんは死んじゃったけど、この人は目録ね。僕はどっちかって言うと設備からいったね。それから鑑賞教材？今の走りですよええ、本以外のものの。これが昭和29年頃。

中村 じゃあ、その20数冊のなかで他に覚えているものはありますか。『手引』以外で。

松本氏 それからね、図書館関係の専門書出したのは、師範学校の会社ね、学芸図書、そこから多く出たね。SLAでも出したよね。あと明治図書。そのなかで『[学校] 図書館づくり』⁽⁵³⁾ っの僕、書いたの。それが昭和30年ぐらいかな。ほとんどこれ(『学校図書館の手引』)がアレで、あとは実際見て勉強するね。氷川を見たり、『氷川学校図書館記』っのものも出ました⁽⁵⁴⁾。

中村 見た学校図書館はどうなのがありますか。

松本氏 まず、松尾さんがいた緑ヶ丘 [小学校]。氷川、行ったねえ。杉並に1校 [筆者注：杉並第四小学校のことだと思われる] あってね、そこに行きました。それから成蹊小学校ね、滑川さんいたから。神奈川県では早川へ行きました。

中村 小田原の [第] 四中 [学校] ？

松本氏 もっと古いのよ。早川。

中村 そのあたりを芳林をつくる時に参考に・・・

松本氏 早川小 [学校] は全職員つれて行きました。研究もやるしねえ。教科と図書館は必須的なものだということがその頃だんだんわかってきたわけです。まあわからせるのが僕らの仕事だっていう意識がありましたからね。全職員が知らなければ駄目だ、というのが僕の結論で。僕の専任に任せるんじゃなく、一人ひとりがってね。それが全職員で資料整備やったり、授業ボランティアやったり、みんな当番でね。資料整備は夏休みに出てや

りました、やってくれました。

中村 たとえば玉川学園に行ったあと、アメリカの、それこそ CIE の人たちが見に行つてすごく感心したっていうのを読んだことあるんですけど⁽⁵⁵⁾、やっぱりすごかったんですか？

松本氏 もうあんとき突出してましたね。学校図書館の経営、皆でしてね。だから僕があそこで特に感じたのはやっぱり図書で調べるっていうのが生活の中に入っちゃってる。それともうひとつね、いっぱいある本。小原先生がね、小学校1年から6年までこれは読んでおきなさいって本が置いてあるのよ。たとえば、聖書なんて1年から6年まで置いてある。それでね、必読書って名前は悪いけど、僕らは戦争中だから、これは読まなくちゃいけないっていうのが、昔はあったんですよ、軍部のアレで。研究これだけしなくちゃいけないって。宮沢賢治の本だとか。そういうことやってたね、昭和23、4年の頃のはね。調べるとかいうのは授業で試してみる、それが一番感心だね。それはもうこれにも深川さんが書いている。アメリカさん感心しちゃってね、日本にもこんな文庫があるのかって。僕は成城は行かなかつたけど。玉川学園行っちゃったから。あと、自由学園、見たりねえ。慶應の幼稚舎も見たけどあのときはだめだったねえ。

中村 成蹊はどうでしたか？

松本氏 成蹊はすごかったねえ。

中村 滑川先生が全部やられてるんですか。

松本氏 堀内〔輝三〕さんっていうねえ、兼任で。作文教育でねえ。

中村 作文教育？

松本氏 文学教育ですね。

中村 成蹊とか玉川それぞれに自分のやり方があるんですか。で、〔松本先生は〕別のタイプの？

松本氏 別じゃないけど。図書館で本が最初に出てきたとき、ギャップもらうんだけどね。それを大切にしていたね。

中村 もう氷川小とかとは別格の素晴らしさがあるんですか？

松本氏 公立じゃ無理。お金が無い、それで皆、寄付。芳林の場合はさきに焼けたけどだんだん皆、裕福になってきたから金出す。日本一の学校図書

館って新聞に出る前に。ところが地方じゃできない。だってお金無いし。公立はお金が無いから追いつけないんです。図書館やるときも金が無きゃできないようなね。地方じゃ、百姓やってそのお金を積み立てたとか、皆、苦勞が多いんです。

中村 本以外に、その当時って IFEL (Institute For Educational Leadership) だのワークショップだの短期のいろいろな講習会が開かれて、その中で学校図書館とか図書館について触れられていたと思うんですが、そういうのには参加されたことは一度もないんですか？

松本氏 参加したことはないけどね。[昭和] 24年ね。東京都の氷川小、椎名町小、見に行ったね。あと、啓明小、これに啓発されたな。このときが芳林小。

中村 [学校図書館に関する研究] 指定校っていうシステムは、氷川小が最初なんですよ。どういう風な形で指定校っていうのは・・・

松本氏 昔はね、これやってるからモデルになるだろうっていうところが選ばれたけど。そんなに一所懸命な学校じゃなかったけど図書館 [が] 有名になっちゃったから、これは図書館教育やればこの学校はやれるっていうんで・・・

中村 一番最初も多分そんな風に、氷川小も。

松本氏 それは文部省直接でやってるね。それから校長自身。椎名町小はこれ校長自身。

中村 ご自身がひっぱってきてしまうぐらい熱意があると。

松本氏 そうそう。[東京都教育庁] 指導主事で図書館の担当だった [近藤修博先生が校長になった] から、椎名町小ね。啓明は女の先生で、熱心な人。それから芳林は松本がいたでしょ、ということできたんですよ。それから全国と東京と最初はかねてたんですよ。

東京都の時報 [筆者注：『東京都学校図書館協議会月報』] っつのはね。つくるとき、記憶でしちゃおかしいでしょ、先入観があるし。ある人の本でもね、読んだらかなり違っているところがあるの。本人そうだと思ってるのよ。ところがこっちは記録があるからね、記録を見るわけですよ。全部に配ったから。月報がね、東京都の1950年第1号。僕はこれあったんだ

けどね、家を建て替えること2度やってるから、全部廃棄しちゃって無かったの。それでそれやっていると全部に聞いたの。そうしたら佐野友彦さんだけ持ってたの。

中村 で、入手したんですね。

松本氏 それで彼がコピーをくれたの。

中村 これずっと続いているんですか？

松本氏 いやいや。これ江東区が取り上げられた1号。創刊号だけこの中に載っているの⁽⁵⁶⁾。1人だけ持ってたの。それで佐野さんからもらってさ。それから深川さんはまだ・・・教科書調査官なんて制度はなかった、まだ文部省には。でね、この人が東大の宗教学科[筆者注：正しくは倫理学科]の出身。有山[崧]さんてのが[日本]図書館協会の。大学の先輩よ、宗教学科[筆者注：正しくは東京帝国大学哲学科]。この次に文部省の事務官なんかやった、井澤[純]さんも宗教学科[筆者注：正しくは倫理学科]。だから日本の図書館つくったのは日本の宗教学科出身の代表ね。

それで話を戻すと、三越ではじめて図書館の展示会やったのよ、こういうのが図書館で必要ですよっていう、用品の⁽⁵⁷⁾。

中村 覚えていらっしゃいますか。

松本氏 はい。[昭和]24年。

中村 どうでした？

松本氏 ほとんどないんだもん。戦後は。僕が行ったら、伊藤伊の社長がまだ元気な頃で、伊藤伊からこれ(写真)借りたんですよ⁽⁵⁸⁾。

中村 参考になりましたか。

松本氏 ああ、なりました。なんにも無いんだもん。

中村 はじめて集まったってことですね、ものが。

松本氏 ここにあったのが最初の設備に必要なよって。だから、本って、昔は読ませてあげるよってというのが図書館。門番て人がいて。

中村 監視してるような。

松本氏 今みたいに接架式じゃなくて。しまっちゃってるんです、奥の方に。そんなんじゃダメなんだよ。いつでも手にとるように。これを本棚にしなさいって。はじめての開放的なやつでね。

中村 伊藤伊の方たちは、反対に言うと、どういうところからそういうアイデアを得たりしてたんですか。

松本氏 あの当時はね、研究熱心。伊藤伊の親父さんてのはもともと図書館カードってものがあってね、カードが専門です。今はデジタル化されてるけど。伊藤伊太郎さんは勉強家でね、自分の研究してるんです、文献読んだりして。それで、専務やった次男は製本の。長男は書架とかね。それから僕と同年の常務やったのはパンチカード。

中村 三男の方ですか。

松本氏 そう、伊藤俊夫さんです。次男が明。長男が伊太郎っていうの。3人も勉強家です。それで講師に頼まれるでしょ。どういう図書館つくったらいいなって、飛び回ってました。で、図書館能率研究会っていうのをつくったんだよ。東大教育学部の裏田先生、高等学校の八潮、その頃の高校で一番いい図書館だった、[東京都立]八潮[高等学校]の甲斐[清通]先生と。中学校は優秀な人がいなかったの、その頃。昭和30年前後かなあ。今の市川の行徳中学校の教頭やってた山岡寛章さん。勉強会やりました、そのメンツで、伊藤伊の社長、専務、常務。金は全部伊藤伊が出してね。僕らはただ知恵だけ。で、社長室集まって。まだ若い時代だったなあ。あの、八潮高校の甲斐さん。皆、死んじゃいましたけど。仲良しになったの。今、市川市が盛んなのはその山岡さんがね、本にもなりましたが⁽⁵⁹⁾、本を読む母親の読書サークル。公共図書館でものすごく盛んになったの。それがいま巡ってるんだと思いますね、市川の母体は。

中村 ところで、松尾先生は先ほどうかかったの、今度は深川先生の思い出があれば。

松本氏 伊藤伊の社長が、アメリカから帰ってきたばかりの時のいい相談相手っていうんですか。それで、文部省、地下鉄で近いでしょ、末広町と虎ノ門だから。僕の空き時間の時、文部省行ってたの。で、文部省の仕事、忙しいのを手伝ってあげました。

中村 それはどういうきっかけで？

松本氏 うちの工事のとき相談相手になってくれたの。だからかなり深川さんの意見入れてあります。ブラウジングコーナーなんてね、娯楽的要素を

入れたのは深川さんのアイデア。それから図書以外の資料の・・・ようにするにノンブック。それも深川さんのアイデア。それで深川さんのことも手伝ってあげなきゃいけないってんで、気があったりしてねえ。それである人、杉並だったから。それで帰るときは渋谷へ行って、永福町へ行く電車に乗って、一緒にね。そんなわけで。その事務室では手伝えないよねえ、すぐ人がきて、文部省の事務室ってのは。その頃は初等教育課って言ったけどね。それで南極探検隊の事務室が普段はから空きなのよ、誰もいないんです。そこへ行って。たとえば、手引書の2冊目⁽⁶⁰⁾の校正とか、現場から見ておかしいとことか注意してよとかね、それはその南極隊の準備室に行って、手伝っていました。恩返しで。それが深い交わりの最初です。それから学校図書館法をつくった時、そこに、大西正道さんを、深川さんがね、連れてきたの。名古屋の議員の出かな [筆者注：正しくは兵庫県第4区]。

中村 え？どこですか。

松本氏 名古屋の選挙区の人なんだけれど。社会党右派でね。松尾さんは公共図書館の法律ができたもんだから、学校図書館の法律もつくと将来発展がないだろうって全国で署名運動したりカンパやったり。それみんな金をなんぼか寄付してるわけよ。手製で。そこからトラブルっていうか、贈収賄事件、今の言葉で言うと。それで松尾さん、2月入ったの、^{ふたつき}判決下りるまで。で、阪本さんはその責任で会長を辞めたの。

中村 それは当時、それぐらいやらないと通らないような何かがあったんですよね。

松本氏 お金をもらってできたんだ、というようなことを言っちゃった人がいたらしいね。

中村 実際そうだったんでしょうかね。

松本氏 そうでしょうね。

中村 じゃあ、そこまで松尾先生がやらなければ通らなかったと思いますか。

松本氏 あの頃はね。

中村 いろいろ読んだりすると文部省の方があまり熱心じゃなかったというか。松尾先生が書いてるのが主ですけど、本当ですか。

松本氏 文部省自体がまだそこまで目覚めてないんですよ。今とは全然、雲泥の差。

中村 深川先生は意識あるし、法律もつくりたい方ですか。

松本氏 うん、そうなんだけど、贈収賄事件があってからやりにくかったらしいですよ、仕事は。だから一部敷居ができた、全国的に。贈収賄でつくった法律じゃないかっていう。で、理科教育振興法ができたけど、そういうのじゃない。でも[学校図書館法の方は]お金でつくったんじゃないかっていう。そういう時代がありました。

中村 一時的に停滞してしまったってことですか。

松本氏 それもちょっとね。[東京]学[芸]大[学]も行ったかね、図書館に。

中村 はい。私、学芸大の修士出なんですよ。

松本氏 そうでしたね、長倉[美恵子]さんから聞いたけど。

深川さんの、ここに持ってきた資料ね[筆者注：東京学芸大学に残されていたらしい資料の一部のコピーだったか。不明]。深川さん、出席簿も書いてるの。ああ、ここだ。「なお、この時期におこった事象として昭和31年2月学校図書館が政治に絡んだ贈収賄事件の疑惑がある。これは1審無罪、2審有罪。・・・少なからぬものがある。」これは佐野さんでも、松尾さんの書いたものでも出てませんから。深川さんだから書けるの。僕だから言えるのです、今でも。こういう事実はあったの。

中村 それは当時、松尾先生が勝手にやったんですか、それともまわり全体なんとなく知っていて、そのカンパはそういう風に使うんだってことがわかってて・・・

松本氏 もうそれは、しなきゃ駄目だろうって言ってたねえ。カンパは。要するに、昔、袖の下か、やらないと江戸時代の幕府は駄目でしょう、お金もらえば便宜を払うと。それはありましたね、日本中にありましたね。今じゃできっこないんだよ。でも、だから議員立法は嫌だって、行政府が出したの方がいいんだ、っていう考えは僕ら80[才]に近い人にはあるけど、そういうことがあるから。それを聞いたのが、[東京]学芸大学でね、全国の図書館の司書の指導者養成講習会、アレをやってる最中でね、各県

から何名か選ばれてるの、僕は東京から選ばれて・・・

中村 それは何年頃ですか？1950年ぐらいじゃないですか。

松本氏 いやいや、贈収賄事件がおきた昭和30年頃、そのときだから。

中村 じゃあ、もうちょっとあとですね、1955年ぐらい。

松本氏 31年かな。31年。で、全国集会あったんです。そのとき聞いたんです⁽⁶¹⁾。僕ら若かったから逆に文部省が僕ら、学校図書館の運動をおさえるんじゃないか、学校図書館は駄目になるんじゃないかと言う人が多かったですね。

中村 落胆したっていう。

松本氏 うーん、そうそう。暗澹としたね、強烈な思い出だねえ、僕も。

中村 じゃあ一応やっぱりそこまでは知らなかったってことですよ。

松本氏 当然、贈収賄なんてないと思ってました。

中村 でも、カンパがどうやって使われてるのかっていうのはなんとなく皆・・・

松本氏 任せちゃってたんだよねえ、松尾先生に。弥太郎さんにはねえ、私は信頼もってたからねえ。僕らもこれお金出したけどこれどういう風に使うとかなんてねえ、疑問もたなかったねえ。「ありがとうございます、お願いします」って。その程度のもんだから。

中村 松尾先生はそのことについては多くをそのあと全然語らない？

松本氏 僕はその頃、図書選定の委員やっていた。しょっちゅう昔は日教販へ行って。最後は千代田区役所のまん前[のトーハン]に移ったけどね、どーんとね。そこへ行って月2回かな、いろいろやりました。それで、今度出た本はこれがいいとか悪いとか。社会科の担当は僕がやった。そのときに松尾さんがねえ、「留置場の飯はうまくねえ」っていうのが記憶にあります。

中村 でも、その事件の内容は絶対に言わないんですよね。

松本氏 それは言わない。こっちも触れたくないしね。僕はもともと世田谷だし、246沿線だから。あの人、ボロ車買ったの、あれも誤解を招いたのね、カンパからの金で買ったんじゃないかって。大曲から家に帰る時にそれによく乗かって、渋谷を過ぎて三軒茶屋で僕降りて。そこでラーメン頼んでねえ。楽しかったねえ。佐野さんもそのときまだ独身だって聞いたから、

松尾さんと僕で。夜仕事手伝ったら帰りは一緒。

中村 法律制定のときの話なんですけど、司書教諭の制度ができていく過程について何か。まず、司書教諭という名称になるということについて何か揉めたとか、揉めたというか、いろいろな意見があったとか。

松本氏 なんかそれ読んだことがある。僕はまだそれにはタッチしてない。年齢的にね。僕はね、28年29年に、成蹊まがいのやって、PTAが金を集めて、事務員を頼めたのよ。東洋大学で講習受けた、司書〔補〕の資格、高校出の。で、甲斐さんの紹介でアシスタントの女性を入れました、東洋大出の。僕が学級の担任やって、専任に〔司書補が〕1人、事務やる人が1人、2人でやったのです。今で言うぜひ学校司書が必要だっていうのと似てるわけ。そんなときに司書教諭はどんな仕事をやったのかって聞かれたわけ。

中村 先生はそのときは専任は解かれたんですか。

松本氏 ええ。さっき言ったように専任やっちゃうと任せちゃうっていう意識があるのよ、小学校の中に。「専任がいるから読書指導や本の使い方は専任がやるから僕らはわれ関せず」っていう意識が芽生えちゃうんじゃないかって僕はむしろ危惧したね。専任をつくったために学校図書館の活用が鈍くなるって。

中村 一度は専任になられたんですよ。

松本氏 それはもう必要に迫られて。研究発表もやらなくちゃいけない、図書館づくりもやらなくちゃいけない、資料もやらなくちゃいけない・・・とつてもやれない。事務に忙殺されて、発表の1ヶ月前は通勤の時間が惜しくて学校に泊り込んだの。そういうことができたから。それで、作法室でね、畳のあるところに、布団ひいて寝てね、先生お疲れですね、って皆、言ってくれて。夜食を運んでくれたりね。のみはしなかったけど。そういう感じで。

中村 専任だったのは2年、28年から29年ですよ。その間にアシスタントを雇ったんですか？

松本氏 2年目に。

中村 それは1人専任がいてももう駄目だっていうことで？

松本氏 かえって本読めないんです。専任やってると忙しくて本読めないんだもん。分類やってラベル貼りやってってことでは。仕事中でも本が読める、専任になったら本が読めると思ってたのに、それなのに整理の一辺倒。

中村 それでアシスタントにそれを任せようと思って、PTAに雇ってもらって・・・

松本氏 一応全部任せました。

中村 その人いつまでいたんですか。

松本氏 僕は教育委員会に入っちゃったからね。結局その子は公共図書館に。司書になって、大田区の。本職になったね。あと男の人が来て。

中村 え、2人もいたんですか。

松本氏 いや、辞めてから。

中村 最初は女性ですか。

松本氏 そう、女性。3年ぐらいで、「小尾通達」ってのが出たんです、東京都に⁽⁶²⁾。PTAから金集めて。全部そこに寄付とか集まって。でも、図書館につくるのに金集めるなんてって。

中村 ストップした。

松本氏 そう。それで小・中・高等学校、高等学校は都立ですね、厳しく言われたのは区立の小・中。東京都もある程度 [PTA雇用は] 止まっているんじゃないかね。

中村 じゃあ、30年から先生は担任に戻られて・・・

松本氏 35年に教育委員会に、千代田区の。それで6年やって。しかも社会教育主事やりました。というのはね、読書っていうのは学校だけじゃ駄目と悟ったの、僕は。家庭がしっかりしてなくちゃ、親が言わないと。そうするとやっぱり社会教育が。で、6年やったの。昭和41年に有山 [崧] さんが、日野市の市長になるの。あそこの出身だから。そのときに学校教育課長で日野市に。そこで9年間、足掛け10年。

中村 呼ばれたんですか、有山先生に。

松本氏 わからないですね、人事はいろいろあるから。文部省の委員も東京都の委員も有山さんと一緒だった。

中村 文部省の委員ってなんですか？

松本氏 「手引」の2番目⁽⁶³⁾。これに出てるかな、入ってる。石山 [脩平]
先生いるね。

中村 石山先生とか、こういう教育界関係の先生はご存知の方、いらっしや
いますか。たとえばこの先生が『図書教育』っていう3号雑誌つくった先
生ですよ。

松本氏 この委員がなってる感じだね [筆者注：『学校図書館の手引』の編
集委員が『図書教育』の編集委員に多いようにみえるということ]。有山
さんはそんなわけで。文部省と東京都の委員一緒にやって、話したことは
なかったけど、こういうところで一緒になったことはあるんです、シンポ
ジウムとかね。日野市に行く前にね。石山先生は偉すぎでさ。石山先生は
阪本先生のところの先輩だもん。稲田 [清助]、加藤宗厚。坂元彦太郎さん
とは幼児教育で一緒だったね、図書館関係でなくて。これも知ってるね、
鳥生さん。この人は話したことあるけど。芦谷さんはこの [東京都立第九
中] 学校の卒業だった。滑川さんとは大変な付き合いです。秋田の人でね、
よく新宿の「秋田」っていう飲み屋で飲んでね、山びこ小学校で有名な人、
あいつが東京を見ないで、東京なんぞよりも向こうの方がきれいだって言っ
たとか、滑川さんが食ってかかってね、東京も見ない奴がなんで東京汚い
なんて言えるかって2人で気炎あげたことあるんです。

阪本さんと滑川さんと無二の親友で。滑川さんが兄貴、兄貴って呼んで
て。だから牧書店ってところ、今はつぶれちゃってないけど、そこで阪本
さんとか滑川さん、本出してるんですよ。今のあすなろ書房の会長ね、彼、
早稲田 [大学] 出て、この編集長やってたの。僕はたまたま本の仕事やっ
てたから牧書店に結構出入りしてて、そんなことあったりして。牧書店の
社長ってのは信州の人。これは知らなかったね。この人も中央区の築地だ
けど会ってないね。

中村 阪本先生と滑川先生と深川先生と久米井先生と松尾先生とかの関係っ
てどんな風になっているんですか？

松本氏 それにはひとつ認識があるんだけど、はじめは深川、阪本、松尾、
仲良しだったの。

中村 滑川先生は？

松本氏 部外者みたいなもん。若すぎたね。本の選定の委員になってたけど、緊密なアレはない。

中村 松本先生は、滑川先生とか阪本先生とは仲いいんですよね。

松本氏 ええ。それは阪本先生の方が上よ。3人、だいたい僕いつも同じだったんです。だんだん年数たって彼らもだんだん偉くなってくと、利害が反するようになっていくの。誰か一人に僕が仕事の肩入れすると、うらまれちゃうわけ。だから、3人とある程度、等距離にいました。できなかつたね、最初はある程度できたけど。

中村 阪本先生と深川先生って利害があり得ますか？

松本氏 阪本さんの真意を聞いたねえ。

中村 そうなんですか。

松本氏 だから、彼は論文の評価がいいから学芸大学に入った。[阪本先生は深川先生の] 面倒みただけからすごく。どっちかっていうと僕は最初は等距離にいたけど本格的に本を書いたりしたのは、深川先生と。一番僕が尽くしたと思うよ。そして、松尾さんはだんだん野党化していくの。そして古い連中皆、[全国学校図書館協議会から] 出て行っちゃった。あの鈴木英二さんってね、どっか現職終わって勤めてたんだけど、出て行っちゃった。全部最初っからの連中、皆、辞めちゃったのよ。八潮高校の[甲斐先生]も辞めちゃって。若林先生も辞めちゃって。皆どンドン辞めちゃって。それで、「学校図書館に自由はないか」って地方に行って講演するような人たちがもたげてきてね、そんな感じだね。

中村 そして文部省の覚えが悪くなって・・・？

松本氏 だめです。敵扱いしちゃうのよ。僕、50年に現場に戻りました。校長なんかは文部省と一緒に学校図書館なんか相手にしない。消せーなんて具合に。

中村 それは校長先生もみんななんとなく知ってるってことですか、全国SLAにそういう人たちがいるって。

松本氏 管理を強めるっていうこと。管理組織の手先がってよくいうじゃない、そういう連中が幅を利かせてたねえ。「拝啓校長殿」とかっていうのがはやった時代がある。SLAのそこを見ても、組合的な発想ね⁽⁶⁴⁾。地方

の県に指示したとか指令を送るとか、そういう言葉を使うんです。研究団体がそういう言葉を使うのかって。研究は指示してやるもんじゃない、自主的にやるもんだ。そういうのが全然無くなってる。それで僕は全日本小学校図書館研究会、これをつくったの。もう20年。僕と長倉〔美恵子〕先生ぐらいだね、おかしいなって思ったの。

中村　なんでそういう左翼的な人たちが SLA に？

松本氏　日本全体がそうなんじゃない？多摩地区だって27市だったかな、ほとんど八王子以外は革新だったんじゃないの。

中村　日教組って、敗戦直後の資料を見ているとすごく学校図書館に熱心ですよ。

松本氏　一番初期です。そうね、昭和20何年でしょ。昭和30年がいいところか。

中村　話がちょっと変わってしまいますが、ラジオって聞いたことありますか。昭和25年くらいまでやっていた。ラジオで滑川先生とか鳥生先生とかが講師になって学校図書館に関する、JOAK で教師向けのラジオ番組をやっていたという記録があるんですが、これを聞いた人がいないので探しているんですよ。

松本氏　それはないね。僕が出たのはね、千代田区の一橋中学〔校〕の生徒で、学校図書館の会談、鼎談かな、をNHKに頼まれて出演したことはある。聞いたことはない。

中村　そうですか・・・

中村　では、まとめも兼ねて戦後50年の今、いろいろお話しかがったんですが・・・

松本氏　あなたの博士論文は何？

中村　博士論文は「戦後日本学校図書館史：米国の影響と日本の独自性」というのを考えてるんですけど、占領期をやりはじめたらそれだけで博士論文が書けるかもしれない気がしてきたので・・・

松本氏　それ言った方がいいね。電話したりしてね。塩見さん、渡辺〔重夫〕さん、テラシマさん？、皆、昔こういうのやってたから。

中村　去年日本図書館情報学会で助成金をいただいてこのインタビューをは

じめたんですね。そのときは今村先生と、それから室伏先生と芦谷先生と、鈴木先生がまだご存命でご病気のところに伺って、テープとらせていただいて。それでこんな感じに昔の思い出話とかをうかがって。で、ここで先生のご意見をうかがいたいです。戦後50年間の学校図書館の歴史、運動史にしても実践という意味でも、それに対するまとめとか感想とかこうすればよかったとかこういうのがこうだったなとか、何か感想とかご意見みたいなものを今後に向けて・・・

松本氏 とにかく丸写しだよ。学校図書館は、アメリカの。だから、あまりにもアメリカ的だったって言えるよね。僕はイギリスもドイツも見てるけど。ちょっと違うんですよ、ドイツとイギリスとね。

中村 あまりにもアメリカ的で、それを今もっと日本的にしてもいいなって思うってことですか。それか、反省してるってことですか。

松本氏 アメリカ自体が教育改革を唱えてるでしょ。で、基礎教育は先生が教え込むっていうね、いつもどこかで必要なんだよ。ただ一般の教師てのは図書館と言っても何も知らない、それは今でもある。結局何も知らないんだ。それから公共図書館との関係はあるけど、あまりにも分類なんか日本十進分類法そのままじゃない。あれがなんとかならなかつたかなってね。小学校独自の分類に。小学校なんか必要ないよ。百万冊もあるわけじゃない。一万冊で足りるでしょ。公共図書館行って使うときってのがこの目的なんだけど、それじゃ公共図書館どれだけ使ってるのかっていうとあまり使ってない。これはワシントン大学行ったときだけどね、小学校かな、大きな分類なんだよね。

中村 それでも日本十進分類法でも、1桁とかにすれば大きくなりますよね。そういうのは。

松本氏 それでもいいけど。僕らのときは分類にこだわったでしょ。子どもを司書にするわけじゃないんだから。僕を子どもが手伝ってくれるのよ、すごく。はじめはそれをいいことに手伝わせてたけど、もっといろんな職業につく人だから、公共図書館の司書になる人だけじゃないから、っていうことを悟ってね、あんまり図書委員を使わないで、ほどほどにしないとね。

中村 子どもに分類はもうちょっとおおまかなほうがいいとか、あんまり図書委員の子にいろいろやらせないほうがいいとか。・・・なるほど、あまりにもアメリカ的か・・・

松本氏 今からみても面白いね、日本の独自性より万国共通なのを。そこで公共図書館の前川さんって知ってる？

中村 はい、恒雄さん。

松本氏 図書館長。教育についてやっててね、同僚だったの。有山さんの下にいたの。で、前川さんの市長〔筆者注：有山崧さん〕はガンで死んじゃったの。分類とか整理は公共図書館だろうとか。予算とか本の選定ってのはお互いにほら、分野があるから言えないけど、分類記号はどっちにしても関わる。2人でやりましょ、てことになってたんですよ。それで、市長が死んじゃったの、ガンで。それで翌年やることペアになって。それで、市長が代わって。

中村 実現したら楽しかったですね、前川先生の。

松本氏 彼がブックモバイルでね・・・

中村 はい、ひまわり号ですね。

松本氏 図書館無くて、ひまわり号1台です。それで7箇所も8箇所もまわるんです。今はいっぱい分館ありますよ。それでレファレンス方式〔筆者注：レファレンス・サービスを指すと思われる〕やろうっていったときに。イギリスではそういうことに十分な教育は届いてるんだね。事務よ、司書教諭やってもね。事務を終わらせなきゃいけない。月給もらってるから、僕らだってやんなきゃいけない。

中村 事務に、たとえば学校司書がいても、司書教諭は専任であるべきだと思いますか。それともいくらか軽減されて教諭であって司書であるっていうのでいいと思いますか。

松本氏 指導面でね、専任だとねえ・・・

中村 そうですか。

松本氏 で、小学校ってのは専任教育だから。高校は別とみて、義務教育じゃないから。小学校ってのは学級やって全部先生が管理やって。中学校は教科担任だから。むしろ、中学校の方が早くなじむのかねえ。

中村 専任司書教諭がですか。なるほど。

松本氏 初期のね、図書館の司書〔教諭?〕については、高校も含めて・・・
室伏〔武〕さんは国語の先生で、僕は社会科ですからね。それから、秋田
県の人も国語の先生。あの時、国語もあったけど、いろんな教科があった。
そのうち図書館は国語科ってなっちゃったんです。どっかにいくときにのっ
けなくちゃいけない、って。どっかの教科に入れなきゃいけないって。

注

- (1) 第1回は、中村百合子「〈研究ノート〉戦後初期の学校図書館について
聞く(上)」『同志社図書館情報学』No.20, 2009. 7, p.107-179.。
- (2) 今村秀夫「学校図書館事始め2：生徒図書委員会とその始動」『学校図
書館』No.427, 1986. 5, p.66-69.
- (3) 「今村秀夫(1986年12月現在)」『作家・執筆者人物ファイル』日外アソ
シエーツ, 1997.
- (4) 前掲(3)
- (5) 今村秀夫編『学校での図書館利用教育：自立的学習者をそだてる』国土
社, 1995. の編者紹介による。
- (6) 今村秀夫「学校図書館事始め1：学校図書館にかける夢」『学校図書館』
No.426, 1986. 4, p.8-71.
- (7) 今村秀夫「学校図書館事始め4：文化活動のセンターに」『学校図書館』
No.429, 1986. 7, p.63-66. 中に、「S先生」とされている。
- (8) みずほ文庫については、新井勝紘による、戦後直後の三多摩地域におけ
る文化運動に関する論考の中でも言及されている(新井勝紘「草の根でつ
ながら西多摩の青年：焦土の中の地域文化運動その4」『隣人』No. 8,
1991.12, p.64-78)。
- (9) おそらく、次のように松尾弥太郎が記している、「教養組合」のことで
あろう。「戦時中から戦後にかけて、長い間の用紙の不足と統制、出版の
統制で、読書の機会に恵まれなかった国民は、戦後生活の欠乏と戦いなが
らも、言論思想の自由の訪れとともに、読書及び出版熱が盛んとなった。

仙花紙に印刷した粗末な本でも、飛ぶように売れて行き、一般には、入手困難なありさまであった。このため、留岡清男らは「教養組合」(21年)を、田中保隆らは「学徒図書組合」(22年)を設立し、図書のあっせんに乗り出した(松尾弥太郎「学校図書館運動のあゆみ」『学校図書館年鑑 1956年版』松尾弥太郎編, 大日本図書, p.3-25. 引用は p.4.)。同様の記述が、松尾弥太郎「学校図書館の発達」『学校図書館事典』深川恒喜, 井澤純, 室伏武編, 第一法規, 1966, p.51-53. や、松尾弥太郎「学校図書館運動10年のあゆみ」『学校図書館』No.105, 1959. 7, p.8-16. にある。

- (10) 今村秀夫「学校図書館事始め」『学校図書館』No.426-429, 431, 433-439, 1986. 4-7, 9, 11-12, 1987. 1-5. の連載全12回。
- (11) 斎藤尚吾『點燈集：読書運動の旅』書肆にしかわ, 1988. に詳しい。全国的な組織というのは、「日本親子読書センター」のことと思われる。
- (12) 今村秀夫「学校図書館事始め8：本格的な学校図書館への準備」『学校図書館』No.435, 1987. 1, p.63-66. に、『学校図書館の手引』について、「とりわけ目を皿のようにしてこの手引書を読んだのは、図書の受け入れおよび払い出し、図書の整理・分類および目録、についてだった」と記している(引用は p.65)。
- (13) 前掲(12)
- (14) 今村秀夫『子どもをみつめる読書指導』国土社, 1967.
- (15) 今井誉次郎『農村社会科カリキュラムの実践』牧書店, 1950.
- (16) 「座談会 学校図書館運動10年の歩みと将来への期待」『学校図書館』No.105, 1959. 7, p.28-49.
- (17) 「教科の中では、社会科が時代の脚光を浴びていた。新任の若手教師がふえてくるにつれ図書館の本などを授業で使わせようという動きが目立ってきた。これは、私の学校だけのことでなく近隣の学校でもそうした話をよく聞くようになっていた」とのちに記されていたことを指して聞いた。(今村秀夫「図書館事始め12・最終回：図書館資料を学習の場で利用」『学校図書館』No.439, 1987. 5, p.63-67. 引用は p.65-66.)
- (18) 前掲(17)の論考の最後に、そのような記述がある。
- (19) 前掲(9), 松尾弥太郎「学校図書館運動10年の歩み」.

- (20) 前掲(9)の論考の中で松尾が、「私は、学校図書館法の制定運動を通じて、文部省の不勉強を知りました。現場の苦しみを本当に知っていないのです。深川氏独り知っていたのでは無力と同じです。深川氏は、もっと文部省内を啓蒙しておくべきでした。」などと記していることを指して(前掲(9), 松尾弥太郎「学校図書館運動10年の歩み」, 引用は p.15.)。
- (21) たとえば、「座談会 1963年学校図書館の課題」『学校図書館』No.147, 1963. 1, p.8-27. ; 今村秀夫「貸本屋ではいけないのか：学校図書館の蔵書構成を考えるために」『学校図書館』No.170, 1965. 2, p.12-15.。
- (22) 文部省は、1959(昭和34)年4月9日、青少年向けの図書選定制度に關する省令「青少年の読書指導のための資料の作成等に関する規程」と告示「図書選定申請要領」を通達し、4月20日実施とした。しかしその後、反対運動が起き、選定制度は事実上立ち消えとなった。(『50年史』編集委員会編『日本雑誌協会日本書籍出版協会50年史』日本雑誌協会, 2007. 参照)
- (23) 文部省編『学校図書館運営の手びき』明治図書, 1959. のこと。
- (24) 『学校図書館』の「再び、教材センター論をめぐる」という特集の冒頭に、裏田の論考が掲載されている。その中で裏田は、「教材センターは Instructional Materials Center の訳語と考えられるが、instructinal materials とは直接教科指導に役だつ資料をさすのである。したがって教材センターという発想は、原則的に instruction をおこなう側、つまり教師の側のものであって、学校教育において理論上必要欠くことのできぬものとされている総合的機能をいうのであり、学校図書館自体とは発生的に血縁関係をもたないのである。」などと述べている(裏田武夫「教材センター論についての覚え書」『学校図書館』No.130, 1961. 7, p.8-11. 引用は p.9.)。
- (25) 今村秀夫「学校図書館はほんとうに設置されたか」『学校図書館』No.300, 1975. 10, p.14-19 (特集 四半世紀の学校図書館)。
- (26) 現在までには、その記述のありかを突きとめられていない。
- (27) 今村秀夫「レファレンス・サービスあれこれ：中学校における実際」『学校図書館』No.83, 1957. 9, p.19-24.

筆者は「週2回授業なし」とここで述べているが、上記の論考には、「私は1週のうち2日だけ図書館の中でのんびりしてみせる日をつくった」と

述べているのみである（引用は p.20）。

- (28) 基準とは、1949（昭和24）年発行の『学校図書館の手引』の第2章「学校図書館の組織」で示されたものか、1949（昭和25）年に文部大臣に学校図書館協議会が答申した『学校図書館基準』であろうか。（文部省『学校図書館の手引』師範学校教科書、1948.；全国学校図書館協議会編『学校図書館基準：解説と運営』時事通信社、1950. 参照）
- (29) 前掲(25)
- (30) 「ネットワーク」という言い方はしていないが、早くはたとえば次の論考で、図書館間の協力について論じている（今村秀夫「まちの読書施設かけある記」『学校図書館』No.110, 1959.12, p.26-31.）。
- (31) 図書館法の第3条に、「図書館は、図書館奉仕のため、土地の事情及び一般公衆の希望にそい、更に学校教育を援助し得るように留意し、（後略）」などとあることを指して。（この条項はインタビューの後、2008年に改正され、いくらか文言が変化している。）
- (32) これについては、今村秀夫「子どもを見つめる読書指導1：テレビとテキストの間に本を」『学校図書館』No.186, 1965. 4, p.51-54. にも、言及がある。
- (33) 前掲(14)
- (34) 「室伏武（1998年6月現在）」前掲(3), 日外アソシエーツ「作家・執筆者人物ファイル」.
- (35) 「室伏武（1998年6月現在）」前掲(3), 日外アソシエーツ「作家・執筆者人物ファイル」.
- (36) 室伏武「学習指導における図書館の方法」『学校図書館学研究』Vol.5, 2003. 3, p.3-18. の執筆者所属による。
- (37) 石坂巖『文明のエトス』河出書房新社, 1995.
- (38) 西田幾多郎『善の研究』弘道館, 1911.
- (39) 終戦わずか3ヵ月後から1950（昭和25）年までに全国23箇所を設置された、日本で「CIE ライブラリー」、「CIE 図書館」と呼ばれていた図書館は、占領軍側の文書では「Information Center」とされている例が多い。
- (40) 松本武編著『社会教育を創る』読書活動研究会, 1993.

- (41) 松本武『読書の教育50年：学校図書館と共に』著者発行，2005.
- (42) 「東京都小学校図書館の50年」編集委員会編『東京都小学校図書館の50年』東京都小学校図書館研究会，1996.
- (43) インタビューの後に、このあたりの経緯を記した、前掲(40)、(41)の著作をお送りいただいた。
- (44) 「あす開く日本一の図書館：神田芳林小学校」『毎日新聞』1953. 9. 30 朝刊6面（都内中央版）.
- (45) 1951年1月3日から4月16日にかけて、久米井束、小針孝哉、佐藤策次、鳥生芳夫、湯木満壽美の5名の学校図書館関係者が、ガリオア資金（GARIOA：Government Appropriation for Relief in Occupied Area Fund）によるNational Leader Projectで図書館視察に渡米し、深川恒喜も同年3月6日から7月9日まで文部省から命じられて学校図書館視察に渡米した（深川恒喜「学校図書館の動向」『図書館年鑑1952』中井正一、岡田温編集代表，図書館資料社，1952，p.264，p.21-26.）。このほか、『学校図書館』No.7，1951. 5とNo.8，1951. 6に渡米者の報告がある。またGHQ/SCAP Records, Box 5404にも英文の報告書などが見つかっている。
- (46) 裏付けはとれていない。
- (47) 文部省は、1947（昭和22）年に、「ローマ字教育の指針」と「ローマ字の書き方」を発表した（1949年には〔文部省〕『ローマ字教育の指針 ローマ字文の書き方』同省，1949. を発行）。さらに1951（昭和26）年には、改訂された「小学校学習指導要領 国語科編（試案）」および「中学校高等学校学習指導要領 国語科編（試案）」で、「ローマ字の学習指導」がひとつの柱としてあげられた。
- (48) 『図書教育』は1949年10月の1巻1号から1951年2月の3巻2号まで出ていた。このころの児童書出版とその周辺については、たとえば、山浦常克「回顧日本の学校図書館6：児童図書出版界の再出発」『学校図書館』No.215，1968. 9，p.66-69. に詳しい。
- (49) 1958（昭和33）年から、全国学校図書館協議会必読図書委員会編『何をどう読ませるか』同協議会. が出版されるようになったことを指している

- ものと思われる。
- (50) その研究成果は、東京学芸大学・第一師範学校男子部附属小学校編著『小学校の図書館教育』学芸図書、1949. にまとめられている。研究は、1948（昭和23）年から行われたとある。
 - (51) 「〈御通知〉事務局移転」『学校図書館』No.65, 1956. 4, p.49.
 - (52) 芳林小学校は、1954年に東京都の学校図書館研究校の指定を受けた。松本氏は、そのとき同校の図書館主任であり、その研究成果をまとめた千代田区立芳林小学校『学校図書館の実践的研究』同小学校、1955. を中心になって編集した。
 - (53) 「学校図書館実践叢書1」として出された、全国学校図書館協議会編『学校図書館づくり』明治図書出版、1954.。
 - (54) 久米井束『氷川学校図書館記』明治図書出版、1954.
 - (55) 深川恒喜また鈴木清は、グラハムを玉川学園の学校図書館に案内したところ、それが理想的に運営されているとして感心していたことを記している（深川恒喜「回顧日本の学校図書館〈1〉：「学校図書館の手引き」編集の前後」『学校図書館』No.210, 1968. 4, p.49-52. ; 鈴木[清]「グラハム女史を迎えて」『全人教育』Vol.17, No.6, 1947. 6, p.2.）。
 - (56) 前掲(42)の『東京都小学校図書館の50年』の p.13に、『東京都学校図書館協議会月報』No.1, 1950. 3, p.1が転載されていることを指して。
 - (57) 日本橋三越本店に伊藤伊が出品して実現したモデル学校図書館の展示のこと。これは、東京都学校図書館協議会と国立教育研究所の共催で、1949年11月8日から10日に国立教育研究所講堂で開かれた、全国学校図書館連絡協議会の併催行事であった。モデル学校図書館の展示と共に、学校図書館向きの本の展示会もあったという。松尾によれば、「これは当時としては画期的なことで、学校図書館関係者だけでなく、東京都民たちもびっくりしていた」という（松尾弥太郎「全国学校図書館協議会の成立」『学校図書館』No.220, 1969. 2, p.50-54. 引用は p.52.）。
 - (58) 前掲(42)の『東京都小学校図書館の50年』の p.18および p.21に、三越で開かれた展示会の写真が載せられていることを指して。
 - (59) 山岡寛章『お母さんの読書会』文教書院、1963.

- (60) 前掲(23)
- (61) 全国学校図書館協議会『学校図書館50年史年表』編集委員会編『学校図書館50年史年表』同協議会, 2001. 中、1956(昭和31)年2月の欄に「東京地検、全国SLA松尾彌太郎事務局長を学図法制定にからむ贈賄容疑で取調べ《1959年1月第1審無罪、第2審罰金刑》；「文部省、司書教諭養成指導者研究集会《講義要項を検討》(東京・東京学芸大)6～11」とある(p.36)。
- (62) 東京都教育委員会教育委員長の小尾帛雄が、1965(昭和40)年から1966(昭和41)年に出した、「入試準備教育の是正について」(1965.11.19)；「学校と家庭の教育上の協力について」(1966.2.11)；「高等学校入学選抜制度の改善と教育の正常化について」(1966.7.14)のことと思われる。
- (63) 前掲(23)
- (64) 全国学校図書館協議会から、1977(昭和52)年以降、1988(昭和63)年まで、海外視察報告が出される際、書名のはじめに冠された「拝啓校長先生」のことを指していると思われる。たとえば、全国学校図書館協議会アメリカ学校図書館視察団編『拝啓校長先生：見てきたアメリカの学校図書館』全国学校図書館協議会, 1977.。

(なかむら ゆりこ。2010年6月28日受理)